

開学100周年へ向けての研究所の課題	1
2000年度「指定研究」研究組織一覧	2
2000年度「一般研究」選考結果発表	3
2000年度「指定研究」研究目的紹介	4
2000年度「一般研究」研究目的紹介	9
1999年度「指定研究」研究経過報告	13
1999年度「一般研究」研究結果概要	24
彙報	30

近代化100周年へ向けての研究所の課題

研究所・所長 吉元 信行

360年もの歴史を持つ大谷大学が、近代的な大学として新たに出発をしてから100周年を迎えようとしている。この近代化100周年を機縁としてさまざまな記念事業や壮大な総合施設の建築が始まったところである。

この真宗総合研究所は、今から20余年前の1981年、本学西北角にあった洗心学寮の建物に産声を上げた。それ以降多彩な研究プロジェクトが生まれ、学術研究と成果の発表が為されてきた。1992年、学内施設建設の事情で、学外にあるかつての育英学寮跡地に移転されたが、その事業は営々と今日まで続いている。

このたび建設予定の総合施設では、研究所はその最上階の大半を占めることになる。今までとは異なって、大学の中核に位置することになるのである。このことは研究所に大学総体として大きな役割が課せられていることを意味している。

「真宗総合研究所」の目的は、真宗の総合的研究という意味だけではなく、大乘仏教の至極としての真宗を基盤とした諸学問の総合的研究と真宗仏教を通しての国際的学術交流の推進である。そのような立場から、これまでも本学の教員を中心にして、国内外の研究者の協力を得て、時機相応のさまざまな研究プロジェクトが生まれ、地道な研究と成果の公表が行われてきた。

本研究所は専任の研究員を置かず、本学で教育・研究に携わる教員や院生がそれぞれのプロジェクトに応じて参加し、また、随時外国を含めた学外の研究者の協力も得るところにある。このことは、研究が固定化、マンネリ化せず、絶えずダイナミックな研究体制がとれるということである。

本年度は、指定研究として、まさに開学100周年に関わる「大谷大学近代史研究」、「国際仏教研究」「清沢満之研究」「西藏文献研究」「大蔵経学術用語研究」「浄土真宗文献研究」「大谷大学FD研究」というようなユニークな研究プロジェクトが生まれ、さらに個人教員を中心にしたプロジェクトによる一般研究が進行中である。これらの研究は、決して一個人研究者や一学科単位だけではできない研究であり、まさに真宗総合研究所にして可能になる共同研究である。

本年度から本学では「人文情報学科」も開設された。社会の急速な情報化の中で、社会の要請として総合施設が設立されることになった。この施設の中には、図書館、一般研究室等主要な研究施設すべてが情報を通じて結び合うことになる。その中であって、研究所は、各学科間や図書館との潤滑油的存在でもあり、また、本学における学術研究情報の中核ともならなければならない。これからの研究所に課せられた課題は大きいと身を引き締めているこの頃である。

2000(平成12)年度「指定研究」研究組織一覽

研究名	研究課題および研究組織
特定研究 大谷大学近代史研究 代表 学長・小川 一乗	研究課題 「大谷大学近代100年史の編纂と史料収集」 研究員 延塚 知道 (チーフ・教授) 木場 明志 (教授) 門脇 健 (助教授) 一楽 真 (助教授) 東館 紹見 (専任講師) 吉元 信行 (所長・教授) 宮崎 健司 (主事・助教授) 嘱託研究員 堅田 理 (本学非常勤講師) 福島 栄寿 (光華女子大学真宗文化研究所職員) 平野 寿則 (本学非常勤講師) 研究補助員 藤枝 真 (博士後期課程第3学年) 安藤 弥 (博士後期課程第1学年) 上林 直子 (博士後期課程第1学年)
特定研究 国際仏教研究 代表 学長・小川 一乗	研究課題 「諸外国における仏教研究の動向と展開の研究」 研究員 Robert F. Rhodes (チーフ・助教授) 箕浦 恵了 (教授) 安富 信哉 (教授) 宮下 晴輝 (教授) 樋口 章信 (助教授) 加来 雄之 (助教授) 渡辺 啓真 (助教授) 延塚 知道 (教授) 鄭 早苗 (教授) 木越 康 (専任講師) 吉元 信行 (所長・教授) 宮崎 健司 (主事・助教授) 嘱託研究員 羽田 信生 (毎田周一センター所長) Alfred Bloom (ハワイ大学名誉教授) Jan Van Bragt (南山大学名誉教授) Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学助教授) Paul Watt (デポー大学教授) 研究補助員 小川 直入 (博士後期課程第3学年) 黒田 真慈 (博士後期課程第2学年) 乾 文雄 (博士後期課程第1学年)
特定研究 清沢滴之研究 代表 学長・小川 一乗	研究課題 「清沢滴之全集の編纂と清沢滴之文集の刊行」 研究員 神宮 和磨 (チーフ・教授) 池上 哲司 (教授) 沙加戸 弘 (教授) 加来 雄之 (助教授) 一楽 真 (助教授) 吉元 信行 (所長・教授) 宮崎 健司 (主事・助教授) 嘱託研究員 寺川 俊昭 (名誉教授) 久木 幸男 (横浜国立大学名誉教授) 今村 仁司 (東京経済大学教授) 研究補助員 藤原 正寿 (真宗大谷派教学研究研究所所員) 名畑直日 晃 (博士後期課程満期退学) 三浦 明司 (博士後期課程満期退学) 中澤 明司 (博士後期課程第1学年)
委託研究 西藏文献研究 代表 学長・小川一乗	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版大蔵経および蔵外文献の研究」 研究員 片野 道雄 (チーフ・教授) 小谷 信千代 (教授) 白館 戒雲 (教授) 兵藤 一夫 (助教授) 嘱託研究員 福田 洋一 (東洋文庫研究員) 研究補助員 Steven Hartwell (Multiscrypt Solutions International, Paris, France) 広浜 哲生 (博士後期課程満期退学) 山田 哲也 (博士後期課程第3学年) 慧 光 (博士後期課程第3学年)
委託研究 大蔵経学術用語研究 代表 学長・小川 一乗	研究課題 「大正新脩大蔵経」経疏部関係典籍における学術用語の研究」 研究員 一色 朋弘 (チーフ・教授) 古田 和彦 (教授) 木村 宣彰 (教授) 織田 顕祐 (助教授) 研究補助員 長沢 円 (博士後期課程満期退学) 上羽 敬子 (博士後期課程第2学年)
委託研究 浄土真宗文献研究 代表 学長・小川 一乗	研究課題 「善導の『五部九卷』の文献研究」 研究員 小野 蓮明 (チーフ・教授) 藤嶽 明信 (助教授) 宮崎 健司 (主事・助教授) 嘱託研究員 三木 彰円 (助手) 研究補助員 鶴見 晃 (博士後期課程満期退学) 橋田 尊光 (博士後期課程第3学年) 本明 義樹 (博士後期課程第1学年)
委託研究 大谷大学 FD 研究 代表 学長・小川一乗	研究課題 「大谷大学におけるFDのあり方と授業活性化のための方策の研究」 研究員 並木 治 (チーフ・教授) 志林 倫 (助教授) 織田 顕祐 (助教授) 高井 康弘 (助教授) 山本 昌輝 (助教授) Didier Wester (助教授) 山本 和彦 (専任講師) 谷口奈青理 (専任講師) 浅若 裕彦 (専任講師) 嘱託研究員 宮崎 健司 (主事・助教授) 岡田 伸夫 (京都教育大学教授) 石村 雅雄 (京都大学高等教育教授システム開発センター助教授) 研究補助員 見義 信香 (博士後期課程満期退学)
委託研究 大谷大学データベース研究 代表 学長・小川 一乗	研究課題 「大谷大学におけるデータベース構築の基礎的研究」 研究員 草野 顕之 (チーフ・教授) 片岡 裕 (教授) 松川 節 (専任講師) 嘱託研究員 宮崎 健司 (主事・助教授) 加来 雄之 (助教授) 山本 貴子 (専任講師) 柴田みゆき (専任講師) 赤尾 栄慶 (京都国立博物館主任研究員) 研究補助員 箕浦 晩雄 (博士後期課程満期退学)

2000(平成12)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
木場 明志	研究課題 「20世紀前半期中国東北地域における宗教の総合的研究」 研究員 木場 明志(教授) 藤島 建樹(教授) 河内 昭円(教授) 桂華 淳祥(助教授) 李 青(助教授)	190万円
片岡 裕	研究課題 「他言語との混在を可能とするチベット語文字コード作成の研究」 研究員 片岡 裕(教授) 宮下 晴輝(教授) 柴田みゆき(専任講師) 嘱託研究員 江 荻(中国社会科学院民族研究所主任研究員)	190万円
織田 顕祐	研究課題 「金石文献による中国華嚴宗の研究」 研究員 織田 顕祐(助教授) 河内 昭円(教授) 若槻 俊秀(教授) 大内 文雄(教授) 佐藤 義寛(助教授) 山野 俊郎(専任講師) 浦山あゆみ(専任講師) 嘱託研究員 一色 順心(教授) 竺沙 雅章(本学非常勤講師) 西尾 賢隆(花園大学教授) 今場 正美(本学非常勤講師) 松浦 典弘(大手前大学専任講師) 島津 京淳(本学非常勤講師)	190万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題および研究組織	補助金
白館 戒雲	研究課題 「『深遠なる空性の真実を明らかにする論書・幸いなる者の開眼』の研究・翻訳」 研究員 白館 戒雲(教授)	90万円
高井 康弘	研究課題 「社会変動のなかの儀礼慣行：タイ農村を中心に」 研究員 高井 康弘(助教授) 嘱託研究員 本林 靖久(本学非常勤講師) 研究補助員 樋木 節(修士課程第2学年) 藤田 直子(修士課程第2学年)	90万円
松川 節	研究課題 「多言語訳仏教文献を利用した初期モンゴル仏教の起源に関する文献学的研究」 研究員 松川 節(専任講師)	90万円

2000(平成12)年度「指定研究」研究目的紹介

特定研究

大谷大学近代史研究 —大谷大学近代100年史の 編纂と史料収集—

教授・チーフ 延塚 知道
(真宗学)

大谷大学は、京都高倉の学寮創設から、すでに330年余りの歴史を有する。しかしながら、1901年の清沢満之による真宗大学開学から数えるならば、来る2001年は、100周年という記念すべき年を迎える。それは単に100周年を祝うということではなく、100年の歩みを確かめることを通して、今後の本学の向かうべき方向を確かめ直す機会となるはずである。

考えてみれば、初代学長清沢満之は日本全体が近代化に揺れる中において、「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。」という宣言のもと、東京巢鴨に真宗大学を開学する。それは日本の近代化そのものを問い直すような眼に立ったものであると同時に、宗派内に閉ざされていた仏教(真宗)を人類に開放するという課題を担うものであった。

本研究班は、数年来、日本近代の中における本学の歩みを確かめるべく、さまざまな史料の収集と整理を行ってきた。それはまた、100周年記念事業の一つとして『大谷大学近代100年の歩み』(仮称)を刊行するための基礎作業であった。中でも昨年は、大学の時代変遷を6期に分け、それに基づいて章立てを行い、本編の骨格を定め、土台となる原稿を依頼するまでに至った。また、図書館に保管されていた学内の公文書を始めとする未整理史料の分類・整理も行ってきた。

本年度は、これまでの学内外史料収集と整理を継続するとともに、史料のデータベース化も進めていく。またこれと並行しながら、提出された土台となる原稿に編集の手を加えて、本編原稿として仕上げていく作業を進めていく。100周年が目前に迫っており、急を要する仕事ではあるが、原稿の編集作業には注意を払いながら、年内には完成原稿を作り、2001年3月末の刊行を目指すものである。

特定研究

国際仏教研究 —諸外国における仏教研究 の動向と展開の研究—

助教授・チーフ Robert F. Rhodes
(仏教学)

本研究は、外国における仏教研究の動向を把握することと、国際社会に浄土教研究を紹介すること、ならびに仏教研究を通しての学術交流の実施を目的とするものである。近年、国際社会において、浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まってきており、国際社会に浄土教の思想研究とその展開を発信し紹介することは日本の精神文化を海外に伝えていく上で重要な意味を持つと思われる。また、仏教研究を通しての国際的な学術交流を果たすことは、同研究を根幹におく本学の果たすべき重要な役割であると考えられる。このような趣旨から、本研究は受信発信の両方面において、下記のように研究を進めていくこととする。

(1)受信

- ①海外における仏教研究書誌の収集。
- ②海外における仏教研究書誌デジタル・データベースの構築。
- ③海外の仏教研究者を招いての、仏教共同研究会の開催。

(2)発信

- ①近代真宗教学翻訳研究。近代真宗教学中の代表的論文を随時翻訳し、出版していく。本年度は、昨年から継続される清沢満之・曾我量深の翻訳研究に続いて、金子大栄・安田理深の英訳に着手、完成させていく。
- ②福音主義神学と親鸞教学との比較研究。1999年5月、ドイツ・マールブルクにおいて行われたキリスト教福音主義神学と親鸞教学とのシンポジウムを受け、マールブルク大学より研究者を招いての共同研究会を開催する。
- ③シンポジウムの成果を「仏教とキリスト教—浄土真宗とプロテスタント神学(仮題)—」として編集。日本語翻訳版出版する。

(3)その他

- ①蓮如論集出版に向けての準備。
- ②韓国・東国大学との共同研究。「日韓仏教信仰比較研究—浄土教思想を中心として—」の発刊。

以上のような形で、研究を進め、本年度は各研究部会の成果報告を提出する予定である。

特定研究

清沢満之研究

—清沢満之全集の編纂と
清沢満之文集の刊行—

教授・チーフ 神戸 和麿
(真宗学)

本研究は、2001年に迎える大谷大学近代化100周年を機縁として、本学における知的資産を公開するため、また本学の原点を確認していくために、清沢満之「全集」の編纂および「文集」の刊行を研究目的とする。とくに2002年の清沢満之100回忌に向けて全集を公開していくことは、清沢満之のみならず近代日本における仏教、思想の研究に資する所少なくないと思える。

さて清沢満之の全集については、これまで何度か編纂されており、とくに西村見暁氏による『清沢満之全集』全八巻（法蔵館、1953-1956年）というすぐれた業績がある。しかし、これらは今日では絶版となって入手が困難であるのみならず、学術的な基礎資料として不十分な点も指摘されている。その意味で、本学が学界や思想界に向けて、清沢満之研究の基礎資料として十分に堪えうる全集を新たに編纂することは本学の責務であると思われる。

全集編纂の方針は今後、検討が重ねていかななくてはならないが、基本的には論文、随筆、日記、書簡などの資料の形式によって分類し、それぞれの分類された資料を編年体とし、随時出版していく予定である。この全集の編纂作業については、本学内外の学識者から組織される「清沢満之全集編纂委員会」（仮称）と深い連携をもって進められる予定である。

本年度は、「全集」編纂の準備として、清沢在世中に出版された文章を中心に原本の校訂、読みの確定、脚注および解題の作成などを中心としてすすめる。さらに、

その研究成果として編纂が終わったものから順次、参考資料などとあわせ研究ノーツ的なものとして公開していきたい。（ちなみに1998年度の一般研究の成果として『清沢満之『精神界』論文集』（平楽時書店）が刊行された。本年度は、『宗教哲学骸骨』の刊行を予定している。）また全集編纂の課題としては、収録予定でありながら原本の所在が確認できていないものが多少あり、これらについて引き続き調査・収集につとめたい。

また全集編纂にあわせて資料編として大谷大学独自の追憶資料（佐々木月樵や曾我量深らの文章など）を収集し編纂していく予定である。

次に「文集」刊行については、本学の学生たちに広く読まれ、本学の建学の精神や清沢の思想にふれることができるものを目指すことになる。原稿の校訂作業などは全集編纂の副産物的な位置づけをもつことになるが、読者をどのように設定するか、清沢のどの文章を収録するか、またはどのような付録（年表、研究書の紹介など）を付すかなどを検討したうえで草案を作成して2001年度の出版にそなえたい。

また上記の「全集」「文集」の編集作業とあわせ、本学における真宗学の確立と展開に関わる資料を収集し、データベース化したい。ことに清沢満之自坊・西方寺所蔵の清沢満之自筆原稿などをはじめとする貴重な資料については、今後の保存と公開を視野に入れてデジタル画像データベースを構築していきたい。このデジタル画像データベースについては、「大谷大学データベース研究班」と協力して推進していくことになるであろう。

委託研究

西藏文献研究

—大谷大学所蔵の北京版大蔵経
および蔵外文献の研究—

教授・チーフ 片野 道雄
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究するとともに、所蔵されているものの中、貴重な文献を内外に紹介することを目的としたものである。

そのために、これまで北京版西藏大蔵経の勘目録の編纂・出版、および本学の蔵外チベット語文献中に含ま

れる稀観本の研究とその影印出版を行ってきた。また、長年にわたって編纂を続けてきた西藏大蔵経勤目録は、昨年度に丹殊爾の最終冊が出版されてようやく完結した。なお、この勤目録は、甘殊爾が3分冊、丹殊爾が9分冊の合計12分冊からなっている。甘殊爾は絶版になっているので、それらの再版をかねて一冊に合本することが望まれる。

一方、本研究はチベット語文献の電子データ化にも取り組んでいる。そのため、1993年度よりパーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh (TLK) を開発し、希望者には無料で配付している。しかし、この TLK はマッキントッシュの新しい OS には対応していないため、TLK をバージョンアップする必要が生じ、1997年度よりその作業に着手して1999年度にはほぼその作業を終了した。その際、TLK の紹介・問合せ・配付をインターネット上のホームページや電子メールを利用することにし、そのための準備にも取り掛かった。その作業もほぼ終了したので、本年度は、その新しい方式を立ち上げることになる。ホームページを使って TLK の紹介や配付 (ダウンロード) をすることは初めての試みなので、予期せぬ問題もあるかも知れないが、研究班として対応をしていきたいと考えている。

また、本研究では TLK を利用してチベット文献の目録やテキストの電子化を進めている。本年度は、引き続き北京版西藏大蔵経総目録の電子化に力を注ぐ。この作業は昨年度に開始されたものであるが、少しでも早く利用できるように、本年度中に書名・著者名の入力を終えるつもりである。

TLK を利用した文献目録やテキストなどの電子データが多くなるにつれ、その検索のスピードやソーティングが求められるであろうから、その方策としてテキストデータをサーチキー (およびソートキー) に変換することなどの検討を始めておく。

委託研究

大蔵経学術用語研究

—『大正新脩大蔵経』経疏部関係 典籍における学術用語の研究—

助教授・チーフ 一色 順心
(仏教学)

『大正新脩大蔵経』全100巻は、漢訳の経律論を収める最も完備した大蔵経である。この人類の貴重な知的文化遺産である、『大正新脩大蔵経』を全世界に開放するために、仏教系6大学 (大谷・龍谷・高野山・駒沢・大正・立正) は「大蔵経学術用語研究会」を組織し、分担して『大正新脩大蔵経』所収典籍の学術用語を研究して『大正新脩大蔵経索引』を完成した。こうした努力によって仏教研究はめざましく発展し、索引自身は現在の視点から見ると多少の訂正を加える必要が生じた。本研究は、このような要請に基づき、本学がかつて責任編集した「経疏部索引」を見直して、改訂版の出版に備えることを目的としている。今年度は3年計画の最終年に当たるので、これまで重ねてきた検討を最終的にどのような形で具体化するかという点のまとめをする。

さらに、現下の国際化・情報化の進展に対応して、『大正新脩大蔵経』をより広く開放するために、大蔵経のデータベース化は不可欠である。『大正新脩大蔵経』に収められた諸典籍は、世界の文字文化の中でも最も複雑で高度なものであるところの漢字によって成り立っている。従って現状の大蔵経の電子化には、文字をめぐるいくつかの困難な問題がある。現行の大蔵経の電子化をめざすのか、それとも新しいものを創造すると考えるべきなのか。かつて仏教がインドに起こって中国に受容されたときと同じような質をもった問題がここにあると言える。この点については、東アジアのいくつかのところで作業が進められており、研究成果が公開されているが、全ての問題を消化しているわけではない。本研究班は、日本において既に『大正新脩大蔵経』の印度撰述部のデータベース化を行っている東京大学印度哲学研究室と密接な連携を保ちながらテキストデータベース化の作業を進めている、これは、重複を避けるためと問題点を共有するためである。具体的には、中国撰述の諸宗部と史伝部に収録された典籍のテキストデータベース化を完成し、公開することを目的としている。今年、大正蔵経

49巻に収録されている以下の典籍についての入力作業を推進する。

2035	仏祖統記	(54巻)	約350頁
2036	仏祖歴代通載	(22巻)	約260頁
2037	釈氏稽古略	(4巻)	約170頁
2038	釈鑑稽古略統集	(3巻)	約50頁
2039	三国遺事	(5巻)	約70頁

委託研究

浄土真宗文献研究 —善導の「五部九巻」の 文献研究—

教授・チーフ 小野 蓮明
(真宗学)

本研究は、来る2001年の大谷大学開学100周年および2011年の宗祖親鸞聖人750回忌を視野におき、浄土真宗を研究する上で不可欠である文献の研究、就中七祖聖教の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とする。

プロジェクト名「浄土真宗文献研究」は、蓮如研究プロジェクトの成果を継承し、七祖聖教の編纂に向けての資料収集と検討作業を行うべく1999年度に再出発した。具体的には、善導の「五部九巻」の中の『観経疏』について、「親鸞加點本」に基づきながら漢文・書き下し文・註を整える作業を進めている。

昨年度においては「観経四帖疏」(玄義分・序分義・定善義・散善義)の四巻について、「宗祖加點本」に基づいて、返り点・送り仮名・左訓等を手書きによって写し取っていく作業を概ね終了した。ただしこれらは不明個所などもあり、今後何度かの確認作業を必要とする段階のものであり、今年度はその確認作業を進める予定である。その確認作業においては、見落としなどを極力回避するために、数人でチームを組んで読み合わせを行うことによって進めていく。その読み合わせの作業においては、漢文部分だけではなく書き下し文・註の部分の確認作業も並行して行っていきたい。これらの作業は多くの時間と手間を要するものであるから、今年度の作業目標は「玄義分」に置き、そこに集中して作業を進め、テキストとしての具体的な様式を示せるところまでを目標としている。なお、他の三巻(序分義・定善義・散善義)

についても、「玄義分」に引き続き順次テキスト化していけるよう作業を継続していく。

また、昨年度から着手した聖典刊行および編纂に関する資料収集・整理についても引き続き作業を進め、資料の内容の検討作業も行っていきたい。

また、学内・学外の講師を招いての研究会の開催を通して、編纂の具体的な作業を明確化すると共に、聖教編纂の基本方針と方向性の明確化をはかっていきたい。

委託研究

大谷大学FD研究 —大谷大学におけるFDのあり方と 授業活性化のための方策の研究—

教授・チーフ 並木 治
(フランス文学)

本FD研究班では、多様化した学生の実態と能力に応じた教育の質的向上が求められている今日の状況をふまえて、豊かな人間性の育成を使命とする本学に相応しいFDのあり方を研究する。いわば上からの改革ではなく、教員の地道な教育実践をふまえた研究会方式によるFD構築の試み自体、本学独自のものと言えよう。われわれは、こうした特徴を十分に生かせる研究を行いたいと思っている。FDというものの性格からしても、その研究は、全教員の連帯・連携と表裏一体のものであるべきであり、研究が本学構成員の意識から遊離したものになることも、細かな技術研究に終始することも、許されないと考えている。現在、本学で強く求められ、また相応しいといえるものは、それぞれの学生の資質に応じた達成感、心の触れ合いの中での学びの満足感、ひいては、学びの自信とコミュニケーション能力を獲得させる教育の実現であろう。このためには、学生と教員を、本学で共に学び、学び合うことによって知的に刺激しあえる構成員同士として捉える視点がFDの基軸になるべきであり、またこうした視点を持つことによって、本学の建学精神に根ざした独自のFDを構築しうる方向性が見えてくるものと考えられる。この点を改めて確認しながら、研究活動を地道に積み重ねてゆきたい。

今年度は、昨年度の研究活動の成果を引き継ぐ一方、学内の10名の研究員と、学外でFDの第一線に立たれている2名の嘱託研究員、そして新たに加わった1名の研

究補助員の計13名で研究班を組織することができた。これによって、これまで以上に広汎な研究活動を行える条件が整ったわけであり、それだけ責任の重さを実感する次第である。今年度は、学内外のFDに関する情報収集と分析に加え、授業活性化のためのより活発な意見交換と連携を求めてゆきたいと思っている。インターネット利用の実験的方法の研究、学生参加型授業やマルチメディア方式応用授業がもたらしうる新たな可能性の研究、教員間および教員・学生間の情報交換と知の共同体意識形成のための公開研究会の開催、外部評価の可能性と有効性の検討、アンケートによる教員意識実態調査と意識共有の試み等、FD研究をひろくコミュニケーションとネットワークの視点から見直しつつ、授業活性化のための具体的施策の研究と実験的实施を行う予定である。

委託研究

大谷大学データベース研究 —大谷大学におけるデータ ベース構築の基礎的研究—

教授・チーフ 草野 顕之
(日本史学)

大谷大学近代化100周年の記念すべき年に、大谷大学は総合施設（仮称）を立ち上げ、広く世界に向けての新たな情報発信を始めることになる。そのためにはこれまでの大谷大学の貴重な学的資産を、劇的に発展するデジタル化の世界に対応して活用できるようなデータベースとして構築することは本学の使命である。しかしこれまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられてはいたが、全学的な視座をもってデータベース構築がなされてこなかった。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行う。

課題となるさまざまなデータベース構築については嘱託研究員の協力をえて行う。また、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、さらには学内の協力者をえて「大谷大学データベース構築に向けての研究会」（仮称）を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有していきたい。

具体的には、下記のデータベース構築を実施していく。

あわせて研究所のホームページをもちいたデータベース公開の検討も行う。

- 1 大谷大学図書館蔵貴重図書目録作成
- 2 北京版西藏大蔵経のデジタル画像データベース化
- 3 親鸞の真跡などの重要な文献のデジタル画像データベース化
- 4 清沢満之自筆原稿のデジタル画像データベース化
- 5 その他

2000(平成12)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

20世紀前半期中国東北地域 における宗教の総合的研究

研究代表者 木場 明志
(日本史学)

本研究は、20世紀前半期における中国東北地域（満州地域）における宗教資料の収集と研究とを総合的観点から推進し、本学提携校である中国長春市東北師範大学との共同研究推進合意に則って、本学における研究基盤の構築を図るとともに、国内研究者との連携・交流を通じて研究の深化と広がりとを求めていくことに目的がある。すでに、1999年度に一般研究（共同研究）の採択を受け、仏教を中心とする資料収集と研究とを進めてきた。同時に、共同研究会において内外の講師を招いて学術研究国際化の方向性からのグローバルな視野を吸収してきた。

2000年度においては、中国側研究者との連携を更に強め、日中両国研究者による当該課題の共同研究会開催を日程に入れ、中国所蔵資料の収集・整理についても東北師大の協力を得て積極的に取り組み、「満州国」期の宗教状況に関する概観の把握に努める。従来は断片的報告にとどまっていた研究を、資料に基づいて逐年的・総合的にまとめていくことを目指す。

具体的には、中国東北地域（満州地域）関係宗教資料の収集整理は国内の満州関係資料復刻版（たとえば『満州年鑑』）などを対象として行うが、逐年的には欠ける年次があるところであり、それを東北師大の研究者の協力によって東北師大図書館あるいは中国東北地域内公立図書館所蔵の資料で埋めようとするものである。その他、当該地域には幾多の「満州国」接收資料の残存が確認されていることであり、中国側研究者の助力のもとに、できる限りの資料収集を行っていきたいと考えている。そうした協力を得ることも含めて、東北師大研究者との研究交流・相互研鑽は必須のことがらであって、今後とも長期にわたって交流・提携関係が継続していくことがお互いに求められるのであり、本研究がその第一歩ともなればと願うところでもある。

共同研究

他言語との混在を可能とする チベット語文字コード作成の研究

研究代表者 片岡 裕
(情報学)

チベットは、古くからインド、中国、モンゴル等と深く関係しており、歴史的宗教的に極めて重要であることが知られている。そのため、チベット語は、シナ・チベット語族の孤立語であるが、上述の理由によって、チベット語本来の単語に加え、サンスクリット語やモンゴル語などが由来の単語を含んでいる。インドで使用された文字を起源に持つチベット文字から、元代の国際表音文字であるパスパ文字やソヨンボ文字を派生した。チベット文字は、単純にチベット語のみの記述に用いられただけでなく、経典等においては、サンスクリット語などの言語をも記述しており、極めて重要な国際的位置を占める文字であると言える。このような学際的に重要な文献が多数存在するチベット語文書研究では、デーバナーガリ文字（サンスクリット語）などチベット文字以外の文字での記述との混用表記が必須となる。従って、チベット文字と他の文字を含むテキストのコンピュータ処理が、チベット及び関連文献研究を大きく加速することとなる。

しかし、チベット文字のコンピュータ文字コード化は、極めて困難であり、過去の試みは、それぞれ問題を残してきた。チベット文字は、構造的に基本音節文字に音価の変更記号（子音の連結と母音の変更など）を付加する形式の文字群（結合音節文字）であり、各文字は、ツェック（区切り記号）で分離される。チベット文字は、ツェックによって1音節単位で分離されるチベット語表記だけでなく、複音節単位で単語としてツェックで区切られるサンスクリット語をも表記しているため、単純な文字コード化が不可能である。また複音節表記での表記形式も複数あり、横方向の図形数と文字数が異なるが、この問題も解決される文字コードでなければならず、このように種々の条件を満たす文字コードが作成されなければならない。本研究はチベット文字コード作成のための基本研究である。

本研究は、社会科学民族研究所の現代チベット語音韻文法構造研究者と共に、本学での文字文献データ研究を加え、チベット文字の入出力を含めたチベット文字文書の正しい処理を可能とする文字コードに必要な条件の研究し、その文字コードの提案を行う。なお、可能な音節の組み合わせを、マハヴィウッドパティを基礎として求め、その字形は、北京版大蔵経を基礎とする。北京版大蔵経は、高再現性デジタル画像データとして参照可能とする。

共同研究

金石文献による 中国華嚴宗の研究

研究代表者 織田 顕祐
(仏教学)

唐代にはほぼ完成した中国華嚴宗の思想は、それまでに様々な形で展開した中国の仏教の思惟を総括し、以後の中国・朝鮮・日本の仏教の展開に大きな影響を与えた。その華嚴宗の成立と展開については、従来仏教内の文献によって教理史的に研究するのが主な方法であった。しかしながら、仏教は人間の全体的な活動であると言えるから、それを人間の営みとして解明するためには、歴史的・社会的・時代的などの様々な角度からの解明が不可欠である。

本研究は、中国の華嚴宗の思想的な展開を、仏教外の歴史資料とも言うべき金石文などによって解明しようとするものである。例えば、大中6(852)年に作られた「杜順和尚行記」という碑文が存在するが、それは華嚴宗初祖の杜順(557-640)の行状を顕彰したものである。碑主の杜順滅後相当の時間がたってから作られたものであり、その歴史的社会的な背景と内容を明らかにすることによって従来の華嚴宗の祖統説をめぐる諸問題に一定の方向付けができるものと思われる。その他に、法蔵と則天武後の関係、澄観の社会的な立場など、華嚴教学内の資料からは見ることのできない面を確認したい。そのための基礎作業として、当面以下の諸文献の解説を共同で行う。

- 1、大唐華嚴寺杜順和尚行記(杜殷、金石萃編114)
- 2、方広大莊嚴經序(武后、普寧藏、全唐文97)

- 3、大周新訳大方広仏華嚴經序(武后、大正10、全唐文97)
- 4、新訳大乘入楞伽經序(武后、大正16、全唐文97)
- 5、大宝積經序(睿宗、大正11、金唐文19)
- 6、大宝積經述(大正11)
- 7、三蔵聖教序(武后、全唐文97)
- 8、三蔵聖教序(中宗、全唐文17)
- 9、大唐大薦福寺故大徳康蔵法師之碑(閻朝隱、大正50)
- 10、円測法師仏舎利塔銘(宋復、金石萃編146)
- 11、基公塔銘(金石萃編113)
- 12、唐故白馬寺主翻訳恵沼神塔碑並序(李邕、卍統1-95-4-90~)
- 13、唐杭州靈隱山天竺寺大徳説法師塔銘並序(全唐文918)

このような方法によって中国華嚴宗を時代的社会的に見直そうというのが本研究の目的である。

個人研究

「深遠なる空性の真実を明らかにする論書、幸いなる者の開眼」の研究、翻訳

研究代表者 白館 戒雲
(チベット学)

チベット仏教の根幹となる理論と実践については研究や理解が深まりつつあるが、基本的文献に沿って検討、評価されるべき内容はまだ多い。本論の著者ケドゥプ・ゲーレク・バルサンポ(mKhas grub dge legs dpal bzang po. 1385-1438)は若くして学者として名声を博した後、ジェ・ツォンカバと出会って全面的に教示を受けた。師の没後には、第二代ガンデン座主ギャルツァブ・タルマリンチェンを継いで第三代となり、ゲルク派の最高権威として教化に努め、顕密の著作を残した。彼らは後に「三父子」と称され尊敬されたが、本論の著者はジェ・ツォンカバの数多くの弟子の中でも最重要である。

本論「深遠なる空性の真実を解明する論書、幸いなる者の開眼」(Zab mo stong pa nyid kyi de kho na nyid rab tu gsal bar byed pa'i bstan bcos sKal bzang mig 'byed ces bya ba. 東北No. 5459)は、大乘、特に中観の理論と実践に関する著者の代表作である。略称を「千

葉」(sTong thun chen mo) と言うように多くの主題—帰依、信仰、予言、了義未了義の問題、中観の歴史、空性の解釈、自立論証と帰謬論証、道の体系—について詳しい論究を行っており、分量もラサ版で473ページ(237葉)と多い。基本的には、師ジェ・ツォンカパの「未了義了義善説心髓」の唯識と中観という構成を受けるが、中観については師の「菩提道次第大論」の観の章と「入中論釈意趣善明」などによるが、さらに因明、唯識、般若、如来蔵、密教など関連問題についても論及している。師の善説をすすめ、多く異論を論駁もしているが、少し異なる見解もある。学説の検討のために素材を提供し、後のゲルク派内での議論の淵源ともなり、重要なテキストとして読まれつづけた。近代仏教学の観点からも第一級の資料であり、すでに全体の英訳が公表されている(José Ignacio Cabezón 'A Dose of Emptiness' 1992 Yew York) ほか、本論の該当部分によった発表もいくつかなされている。当研究の目標は、従来のインド・チベットの大乘仏教の流れ、ジェ・ツォンカパ独自の思想を、さらにそれに対する反論と再反論の流れなどをも含めて押さえるためにも、本論を緻密に読解、翻訳すること、Cabezón氏の英訳と注記(本論以降のゲルク派と他派との論争に主眼を置いたもの)において欠けているものを補うこと、著者の伝記を研究紹介することである。故国チベットでも傑出した指導者が乏しくなり、生きた学道の伝統が失われつつあるなか、当研究者がかつて受けた伝統的教育を近代仏教学の観点に照らしながら留めてゆくこと、仏道の理解と実践に関しても広く啓発的なものとなることを願っている。本研究の成果として本論前半の翻訳研究は、藤仲孝司氏と共著『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅲ』(文栄堂)において2001年3月に出版することができた。

個人研究

社会変動のなかの儀礼慣行： タイ農村を中心に

研究代表者 高井 康弘
(社会学)

タイ農村には、現在、資本主義的市場経済が急速に浸透しつつある。農村住民は都市的生活様式に傾斜しつつ

ある。それに伴って、彼らの儀礼や生活慣行も変化を強いられる。しかし、そのありようは案外多様である。たとえば、北タイに特有の精霊儀礼はここ数年より派手に行なわれるようになったし、東北タイの農村寺院の物的施設は急速に充実してきている。こうした動きを担う農村住民たちにインタビューすれば、「祖先からの慣行」という言葉を何度も聞くことになる。しかし、伝統慣行の維持・更新に関する住民間の了解不一致や軋轢もそこには見え隠れする。本研究はこうした例に象徴される地域社会の儀礼・慣行の現状の多角的な検討を、タイ農村などでの調査を通じて行なうものである。

主な調査地は北タイ地方チェンマイ県の一農村であり、作業の第一は集約的インタビューおよび観察による儀礼慣行・生活慣行・就労形態・農村内社会関係などの現状把握である。同村は1980年代中頃から継続的に調査中の農村なので、過去の資料との照合を行ない、変化の概要を把握したい。考察にあたっては、文化変容を、当地住民個々の生活の再編、さらに住民間の社会関係の再編と関わって生起する、自分たちの文化・慣行をめぐる葛藤・選択・合意の過程であり、文化・慣行あるいはそれをめぐる社会関係の創出・更新過程であると、ひとまず考えておきたい。調査のなかで、こうした枠組みを再考しつつ、事例記述を進めたい。

また、副調査地として、東北タイ地方ローイエット県の平地農村、ラオス農村部、日本の過疎農山村などを予定している。東北タイについては90年代中頃から調査を継続中の農村を事例とし、すでに拙稿「儀礼実践の動態」(『続・タイ農村の構造と変動—15年の軌跡—』勁草書房、2000年2月刊行、所収)のなかで、ある程度の見取り図を描いたが、さらに補足調査を行ない、北タイ農村との比較作業に進みたい。比較作業に際しては、別記の研究組織で臨み、メンバー相互が同時並行的に、あるいは相互乗り入れしつつ実地調査を行ない、知見を交換する予定である。こうした作業を通じて、後期資本主義経済下の地域社会の文化状況についての理解を深め、タイ農村におけるその特質について考えたい。

個人研究

多言語訳仏教文献を利用した初期モンゴル仏教の起源に関する文献学的研究

研究代表者 松川 節
(人文情報学)

インド・チベット仏教圏の最北に位置するモンゴルにおいて、仏教がいかなる隣接文化圏を通じて伝播・弘通していったかを、多言語訳仏教文献の成立過程を追跡することによって文献学的に解明することを目的とする。

従来、モンゴル仏教の研究は、主としてその第2弘通期（16世紀後半～18世紀におけるチベット仏教ゲールク派のモンゴル布教期）に成立したモンゴル仏典や、チベット語・モンゴル語による仏教年代記に基づいて行なわれてきたのであり、これを遡る第1弘通期（13世紀後半～14世紀の元朝期）については、第2弘通期に成立した仏教年代記の記述を鵜呑みにし、チベット仏教起源を強調するという、歴史的に逆行する研究が依然として多数を占めている。本研究は、東アジア各地から出土した元朝期、あるいは元朝期に遡ると考えられる多言語訳仏教文献（漢語・モンゴル語・ウイグル語・チベット語などの翻訳を有するもの）の写本・刊本を精査し、あわせて、同時代の歴史史料を用いてその歴史的成立背景を吟味することによって、初期モンゴル仏教に対してウイグル仏教とチベット仏教がいかに関与していたかをあきらかにするものである。

モンゴル仏典の翻訳起源については、チベット原典との比較を主とする樋口康一氏の一連の研究や、モンゴル語におけるウイグル語仏教用語の借用形態を言語学的に分析した庄垣内正弘氏の研究が知られており、初期モンゴル仏典の成立におけるウイグル仏典の影響についてもすでに指摘されている。しかしながら、ウイグル仏典を直接の翻訳原典とするモンゴル仏典は未だ見つかっておらず、また、漢語・モンゴル語・ウイグル語・チベット語などで存在する多言語訳仏教文献を用いてこの問題にアプローチする研究も存在しない。これに対して申請者は、中国撰述『仏説北斗七星延命経』の漢文・モンゴル語訳・ウイグル語訳・チベット語訳各テキストを比較研究することにより、同経典のモンゴル語訳がウイグル語訳を翻訳原典としていた可能性が極めて高いことをす

に指摘している。本研究は、申請者のこの独創的な手法をさらに発展させようとするものである。具体的には、初期モンゴル仏典の成立に関わる多言語訳仏教文献のテキスト・画像データベースの立ち上げを年度内の目標とする。

1999(平成11)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大谷大学近代史研究 —大谷大学近代100年史の 編纂と史料収集—

教授・チーフ 武田 武麿
(宗教学)

本研究は、大谷大学史編纂を目的として各年度ごとに中心課題をもって調査、研究を行い、大学史の完成を目指している。以前より大学史編纂を目的として基礎作業を行うべく、指定研究の特定研究として組織されてきたが、1998年度よりは大学史編纂の具体的作業に入るべく研究班名を「大谷大学近代史研究」とし、研究課題も「大谷大学近代100年史の編纂と史料収集」と具体的目標をかかげるものとなっている。一方、大学史編纂の基礎となる学内外の関連資料の収集、整理にも力を入れ取り組んでいる。

まず会議および研究会を下記のように行った。

1999年

- 第1回 4月6日(火)午後2時 於：真総研中2F
本年度研究計画の打ち合わせ
東京都立公文書館所蔵の真宗大学関連史料について
学史研移転について
大学図書館蔵史料の移管について
- 第2回 4月20日(火)午後5時半 於：真総研本棟
大学史編纂方針(6期の時期区分)の再確認
研究会および拡大研究会の持ち方
- 第3回 4月27日(火)午後2時半 於：第3会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
- 第4回 5月20日(木)午後4時 於：2研分室1
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
- 第5回 5月27日(木)午後6時 於：第4会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
- 第6回 6月3日(木)午後6時半 於：近代史研究室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
- 第7回 6月10日(木)午後6時半 於：第5会議室
東京での資料収集の結果報告
- 第8回 6月17日(木)午後6時半 於：第5会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
- 第9回 6月22日(火)午後6時半 於：第5会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
- 第10回 7月6日(火)午後6時半 於：談話室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
「学徒出陣」・「勤労報告」に関するアンケート調査の検討
- 第11回 7月19日(火)午後 於：第5会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
「学徒出陣」・「勤労報告」に関するアンケート調査の検討
- 第12回 7月29日(木)午後2時半 於：尋源会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
編集計画の検討
- 第13回 8月4日(水)午後 於：第5会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
「学徒出陣」・「勤労報告」に関するアンケート調査の検討
編纂計画の検討
- 第14回 8月9日(木)午後2時 於：第5会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
執筆担当者の選定
編纂計画の検討
- 第15回 9月3日(金)午後4時 於：第5会議室
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
編纂計画の検討
- 第16回 10月7日(木)午後6時 於：談話室1
『大谷大学近代百年のあゆみ』(通史篇)目次案の検討
編纂計画の検討

2000年

第17回 1月13日(木)午後0時10分 於：第4会議室
執筆担当者会議
学長の執筆依頼挨拶
チーフの経過説明および編纂計画の説明
質疑応答

第18回 2月15日(火)午後3時 於：第4会議室
「学徒出陣」・「勤労報告」に関するアンケート
調査の検討
編纂計画の検討

第19回 2月22日(火)午後5時半 於：第4会議室
明年度計画の打ち合わせ

次いで学外学会では9月20日(月)～22日(水)に金沢大学を会場として開催された全国大学史資料協議会に参加し、基調講演と各分科会での大学史編纂および資料の収集・整理の方法について参考となった。また資料収集では、継続している図書館所蔵の学事関係資料の整理をほぼ終え、翻刻・データベース化に力点をおいた。

以上、1999年度は、目前に迫った大学史刊行を見据えて、実質的編纂事業に入ったといえる。

特定研究

国際仏教研究 —諸外国における仏教研究 の動向と展開の研究—

教授・チーフ 安富 信哉
(真宗学)

本研究は、外国における仏教研究の動向を把握することと、国際社会に浄土教研究を紹介すること、ならびに仏教研究を通しての学術交流を実施するものである。近年、国際社会において、浄土教、とりわけ親鸞の思想への関心が高まってきており、国際社会に浄土教の思想研究とその展開を発信し紹介することは日本の精神文化を海外に伝えていく上で重要な意味を持つと思われる。また、仏教研究を通しての国際的な学術交流を果たすことは、同研究を根幹におく本学の果たすべき重要な役割であると考えられる。

本研究班では、このような趣旨から、受信発信の二方面において研究を進めている。

(1)受信

- ①海外における仏教研究書誌の収集。
- ②海外における仏教研究書誌デジタル・データベースの構築。
- ③海外の仏教研究者を招いての、仏教共同研究会の開催。

(2)発信

- ①近代真宗教学翻訳研究。近代真宗教学の代表的論文を随時翻訳し、出版していく。本年度は、昨年から継続される清沢満之・曾我量深の翻訳研究に続いて、金子大栄・安田理深の英訳に着手していく。
- ②第3回ルードルフ・オットー・シンポジウムに向けての研究。1999年5月、ドイツにおいて行われるキリスト教福音主義神学と親鸞教学とのシンポジウムに向けての共同研究会の実施、ならびにシンポジウムの開催。
- ③シンポジウムの成果を「仏教とキリスト教—浄土真宗とプロテスタント神学(仮題)—」として編集。日本語翻訳版出版に向けて、準備する。

(3)その他

- ①蓮如論集出版に向けての準備。
- ②韓国・東国大学の研究者と、「日韓仏教信仰比較研究—浄土教思想を中心として—」のテーマをもとにした共同研究会の開催。

以上のような目的に基づく研究経過は、以下の通りである。

(1)受信

研究目的①・②に関しては、海外仏教研究書誌の収集とそのデータベース化を、継続して作業中である。③については、「西欧社会における浄土真宗独自の可能性」「国際的な視野から見た近代真宗学、または教学者の意義」の2つの報告論文を、本研究所研究紀要に掲載。

(2)発信

- ①清沢・曾我両氏の代表論文4編を“Two Shin Buddhist Thinkers”として製本。②の成果であるシンポジウムへ、参考資料として提出。金子大栄の「真宗学序説」安田理深「名は単に名にあらざる」の翻訳に着手。
- ②ドイツ、マールブルク・フィリップス大学神学部と共催で、第3回ルードルフ・オットー・シンポジウムを開催。「浄土真宗と福音神学」と題し、4日間にわたってそれぞれ6つのテーマで討議を

かさねる。詳細については、ドイツ語版報告はフ
ィリップ大学より、日本語版については大谷大学
より下記③の通り作業中。

③「仏教とキリスト教—浄土真宗とプロテスタント
神学(仮題)—」として編集済み。日本語翻訳版
出版に向けて、校正中。

(3)韓国東国大学と、共同研究会を開催。(日本・韓
国において各1回)

以上

委託研究

真宗史料研究 —『園林文庫』目録 データベースの作成—

教授・チーフ 木場 明志
(日本史学)

本プロジェクトは、東本願寺所蔵の一大近世・近代史
料群である『園林文庫』史料の整理作業、および史料目
録データベースの作成を目的としてきた。1991年度(平
成3年度)のプロジェクト発足時には、重要史料の研究
と翻刻・出版を同時進行させることも盛り込まれていた
が、3～5年と見られた作業期間が長引くにつれ、『園
林文庫』整理と目録データベースの作成に目的を絞り込
んで一刻も早い作業完成を期してきた経緯がある。

その結果、本年度をもって、目的とした『園林文庫』
史料の整理、および史料目録データベース作成に関する
すべての作業を終了することができた。この間、支援と
督励を戴いた大谷大学真宗総合研究所、そして貴重な資
料を長く貸与して戴き、常に援助を忝くした真宗大谷派
本願寺当局に対し、深甚の謝意を表するものである。

以下に作業報告を記す。

1 1999年度(平成12年度)作業報告

当年度を本プロジェクトの最終年度と位置づけ、残余
の史料格納ダンボール箱24箱分(全182箱の内)の史料
カード作成による整理作業、および史料目録データベー
ス作成のためのコンピュータ入力に全力を注ぎ、ようや
く9年間に及んだ作業を完了した。今年度の史料整理作
業は、巖如上人関係諸記録、同上人和歌詠草、同印譜、

達如上人関係書類、和讃版木、などが主であって、作成
した史料整理カード数は単年度過去最高の6885枚にのぼ
った。その史料整理カードデータに基づき、分類コード
を付加しつつコンピュータに入力し、目録データベース
としての最良の形を考慮し、最終的には9年間の全史料
データをMOディスクに収納した。当年度は、史料整
理とデータベース作成の最終作業であったので、それぞ
れに特に経験豊富なベテランOBを研究補助員として迎
え、作業総括が効果的、かつ効率的になされるようにし
たことが功を奏した。

2 全作業を終えての報告

①『園林文庫』史料整理作業結果の概要

具体的な作業としては、1953年(昭和28)年9月に
緊急調査として真宗大谷派宗務所庶務部が作成した
『園林文庫調査目録』(2冊、旧目録と略称)に基づ
き、改めて史料の1点ごとの内容を確認すると共に、
更に詳細な史料データの採取を期して、可能な限りの
史料分類を行い、史料1点につき1枚の史料調査カー
ドを作成していった。調査カードには、旧史料名称の
ほかに、内容に即した新史料名称、内容による史料分
類、形態、作成年代、発給者、宛所、などの項目を設
け、将来における文化財指定の際の調書としても耐え
るものを目指した。その結果、当初の目録見をはるか
に越えて、旧目録の8倍の史料点数が確認され、併せ
て史料内容の詳細を把握することができる史料目録デ
ータベースを完成するに至った。

『園林文庫』史料の調査整理と目録作成の全作業に
よって確認された史料総点数は、

旧目録上の史料点数	5,314点
旧目録に対応する実際の点数	6,488点
史料調査整理上の実質史料点数	41,686点

であり、これらすべての史料の1点ごとには調査番号
を付し、番号順に整理用封筒に入れてダンボール史料
収納箱203箱に格納した。史料調査整理カード4万1
千余枚は調査番号順にファイルボックスに収納し、後
日の用に供することの便を図った。もっとも大切な作
業成果である史料目録データベースは、十分な検討の
末にMOディスクにファイル(41,686件)として収納
した。

②『園林文庫』史料における注目すべきことがら

当史料群は江戸時代末期から明治時代中期にかけて
の真宗東本願寺派(真宗大谷派)宗主、達如・巖如上
人に関するさまざまな書類や記録を中心としている。

聖教類や内外典籍をはじめ、宗門内の寺務一般から
教団の動向を窺わせる各種公的書類、また宗門外の公

家・幕閣、さらに明治政府要人らとの交際や国家行政との関連を示す書簡・文書類に至るまで、その史料内容は多岐にわたる。

史料の分類項目としては、

- ・近世、近代の宗主関係
- ・近代宗務
- ・歴史、本尊、聖教など由緒
- ・寺法、法規
- ・得度、任官など宗主礼式
- ・儀式、法会、作法
- ・政教関係
- ・役職、職制
- ・公武関係
- ・財政
- ・本末関係
- ・諸国下向
- ・末寺、別院関係
- ・家臣関係
- ・日記、文藻
- ・異安心、学寮など学事
- ・宗報
- ・宗主、連枝、管長任免
- ・近世の本願寺、寺務
- ・系譜、年譜
- ・連枝礼式
- ・社会関係
- ・記録、留書、回状
- ・交際
- ・法要、法務
- ・作事、屋敷地
- ・生活、道具
- ・宗義、宗事
- ・内事財務
- ・その他

にコード番号を付して行ったが、概観するところ、各分類項目をほぼ網羅する形で史料が存在した。このことから、『園林文庫』史料は、東本願寺の近世・近代史料としての第一級の史料的価値を有するものであるといえる。

上記のことがらは、日本史研究上の重要なテーマである宗教と国家との関係の解明、そして、真宗大谷派における宗門近代史の検証に多大に益することのできる資料群であることを意味する。これらの史料群にはまったく知られていなかったことがらについての史料を数多く所蔵し、まさに新しい宗門近代史像を提示することになるであろう。そのためには、史料整理の終了を踏まえ、今後は、本史料をめぐる基礎的研究、および本史料群内の基礎史料・重要史料の翻刻と出版、さらには公開の必要性が指摘されることである。

委託研究

西藏文献研究

—大谷大学所蔵の北京版大蔵經 および蔵外文献の研究—

教授・チーフ 片野 道雄
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的にしたものである。1999年度は、北京版西藏大蔵經の丹殊爾勘同目録の第九分冊（Ⅱ-3、最終冊）の発行、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムのバージョンアップ、そのシステムを利用した北京版西藏大蔵經総目録の電子化に関わる作業を行った。

(1)丹殊爾勘同目録に関しては、遅れていたⅡ-3（律疏部・本生部・書翰部・因明部・声明部・医方明部・雜部）の校正作業が終了、1999年9月に発行することができたので、関係機関に配付した。丹殊爾勘同目録の第一分冊が1970年に発行されてから実に30年近い年月がたつてようやく完結したことになる。丹殊爾勘同目録の前に発行されている甘殊爾勘同目録（全三冊）と合わせて、ここに北京版西藏大蔵經の勘同目録の完成をみたのである。この勘同目録はその価値が認められ、入手希望もかなり寄せられるが、甘殊爾勘同目録はすでに絶版であるためそれに応じられない状況である。そのため、勘同目録の全冊完結を機に、合冊して再版するということも考えるべきであろう。

(2)パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システム Tibetan Language Kit for Macintosh (TLK) は、すでに内外のチベット研究者等に無料で配付され好評を博している。その理由として、このシステムはチベット文字としてコード化されているため、そのデータに汎用性があり、しかもチベット文字の入力が容易であるなど使用しやすいことによると考えられる。

3年前、マッキントッシュのOSとその機能拡張ソフトがバージョンアップされたが、従来のTLKはその新しいOSに対応しないことが判明した。そのため、新しいOSに対応するよう当該チベット語システムをバージョンアップすることが必要になり、その年にバージョンアップ作業に着手し、97年3月にほぼ完成の状態

に至った。しかし、配付の直前になって TLK のインストーラにバグが見つかり、その修正やその他の改善のために思いのほか時間を要したが、ようやく99年度の半ばに完了した。なお、この TLK の新しいバージョンはインストーラによって TLK をインストールする形式をとっており、インストールに際して、著作権・使用許諾条件・免責に関する項目からなる「使用許諾契約」に同意することを求め、もし同意しなければインストールできないことになっている。

当研究班では TLK の登録ユーザーや関心を持つ人たちのために窓口として、98年度から TLK 専用の電子メールアドレス (TLK@cri.otani.ac.jp) を設けて、それぞれの問い合わせに対応している。そこには、既登録ユーザーからの問い合わせとは別に、新たに TLK に興味や関心を持った人たちから多くのメールが寄せられている。特に外国からのものが多く、TLK の入手方法や費用などを尋ねてきている。メールで寄せられる要望の中には、希望者が直接に TLK をダウンロードしたいというものが多くある。そのため、当研究班では真宗総合研究所のホームページの中に TLK 関連のページを設け、そのページから TLK を直接ダウンロードできるように、98年度から準備に取り掛かった。しかも、そのようなページを設ければ、TLK に関する情報をアナウンスすることや、TLK の登録ユーザーや関心を持つ人たちとの直接的な接触も可能となるのである。

TLK 関連のウェブページ作成は、スティーヴ・ハートウェル嘱託研究員が中心となり、TLK の特徴や使用方法を見やすい形で紹介することと、TLK を希望する者がそのページ上から直接ダウンロードできることを考慮しながら進められた。その際、研究所のホームページから直接ダウンロードを認めることは、研究所としてそれを正式に一般公開することであるから、次の二つの点に留意することにした。

- ・ダウンロードは無条件に認めるのではなく、少なくとも本人の電子メールアドレスの送付を求める。そして、今後の TLK の情報や案内を希望する者には、ページ上に用意した登録フォーマットによってユーザー登録をしてもらう。
- ・ウェブページ上に TLK は大谷大学真宗総合研究所の著作物であることを明示する。

(TLK を実際にインストールする際に前述のように「使用許諾契約」に同意することを求めているので、ダウンロードの段階では法的な細かなことは必要ないと考えられる)

ウェブページの作成作業は幾度も手直しをしながら進められ、1999年度末にほぼ完成した。このページは英語

と日本語の二つの版からなっている。ページの表紙として英語版を用いているが、日本語版を見たいときは表紙において簡単に切り替えができる。

(3)北京版西藏大蔵経総目録の電子化

TLK を利用したチベット語関連文献の電子化については、1999年度から北京版チベット大蔵経総目録の入力に着手した。基本的には現在の冊子体総目録の内容に沿いながら、甘殊爾・丹殊爾勘同目録の中から必要な項目をデータとして追加する形で、電子版総目録のフォーマットを定めた。このフォーマットはデータベースソフトの4Dを使って作成されたが、その際、福田洋一嘱託研究員から多くのアドバイスを受けている。福田氏は東洋文庫において電子版蔵書目録の作成に中心的な役割をはたしており、チベット語文献の電子目録フォーマットについても貴重な経験を持った研究者である。

この4Dを使ったフォーマットを用いて、1999年6月頃から北京版総目録のデータ入力を開始した。入力は研究補助員とともに主に大学院生のアルバイトに依頼して進められた。

委託研究

大蔵経学術用語研究

—『大正新脩大蔵経』経疏部関係 典籍における学術用語の研究—

助教授・チーフ 一色 順心
(仏教学)

『大正新脩大蔵経』は、今日漢訳された経律論を収録する大蔵経としてはもっとも整備されたものである。それ故、仏教研究に携わるものにとつての標準として全世界の仏教研究者に利用されている。一口に仏教研究といっても様々な関心の持ち方の違いや、目的の相違があり、『大正新脩大蔵経』は極めて多様に利用されている。それ故、東洋的な英知の結晶であり膨大な量と無尽の内容を含む大蔵経が幅広く多くの人々に利用できるようにするために様々な工夫が為されてきた。その代表的なものが『大正新脩大蔵経索引』である。本研究は、『大正新脩大蔵経』の学術用語の研究を通して、人類の貴重な知的文化遺産である仏教を広く世界に公開することを目的としている。そのために現在は主につぎの三つの点を研究の中心にしている。第一は、既に述べたような、大蔵

経の研究の結果である『大正新脩大蔵経索引』の点検見直し作業である。第二は、活字離れが進んでいると言われる現代の学生に大蔵経を開放するための方法を探ること。第三は、そのための一つの便法として大蔵経のテキストデータベースを構築することである。

まず、第一の点に関する報告を簡単にまとめておく。今年度は、昨年から3年計画で始まった『経疏部索引Ⅱ』の見直しに関する研究の第2年目に当たる。『経疏部索引Ⅱ』が、どのような内容を持つものであるかについては、昨年の研究経過に触れたので、ここでは省略する。大きく言って、新旧両訳の『華嚴経』に関する注釈書の研究結果である。特に、法蔵を頂点とする華嚴宗の見方については、近年いくつかの問題定義がなされており、そうした研究成果をどのように本索引に表現していくかが当面の課題であった。まず、解題に関して言えば、内容を検討した結果、訂正しなければならないような過ちは現在のところ存在しないことが明らかになった。ただ、文章がいかにも硬く、入門的な学生や一般の人々にはとても読むことができないのではないかという点が若干気になる場所である。次に索引の本文に関して言えば、誤植などはほとんど無いことが明らかになった。これは、索引の収録語のすべてについて追跡調査した結果ではないが、見出し語の配列についての原則や表記法の統一など、それまでに本学が蓄積したノウハウを十分に活用して出来上がったものであることがよく読みとれるのである。なお、点検の過程で見つかった多少の誤植は今後何らかの方法で訂正したい。今後未点検の部分の点検を進めて、全体の点検を終えたいと思っている。

第二に、活字離れが進んでいると言われる現代の学生に大蔵経を開放するための方法を探る点についてであるが、数年前から大蔵経の主要典籍に関する解説書を出版しようと準備を進めている。入門期の学生が仏教研究を進める場合、主要な典籍とそうでないものとを区別することが意外に難しいということは、我々が日常の授業などを通して感ずることである。修学の浅いものにとっては、眼前にあるものがどれも等しい価値を持つもののように見えるからであろう。典籍の軽重が分かるということは、ある程度修学が進んだ結果なのである。この意味では、軽重かまわずすべての情報が与えらえるということは、初学者にとってはむしろ学習の妨げになる場合があるかもしれない。現代は情報化の時代であり、多くの情報を得ることが最善であるという考え方が主流であるように思われるが、そうでない場面もあるように思う。我々が、大蔵経の主要典籍を選んで解説しようとしたのは、このような意図によるものである。しかしながら、大蔵経学術用語研究会を組織してきた仏教系六大学の間

には、この点の理解について多少の温度差があり、本研究は開始数年を経ても未だ終了していない。本学は、既にすべての分担責任を終えており、調整を経て出版を待つばかりの状態である。

最後に、第三の大蔵経テキストデータベース構築に関する研究の進展に関して要約を述べたい。現在、我々が取り組んでいるのは、大正蔵経の47・49巻である。具体的な典籍名などは、既に『研究所報』に概要を報告したので、ここでは省略して、要点と問題点の報告に留めたい。作業の具体的な進行は、およそ以下のようである。まず、大正蔵経の普及版を解体して、1頁ごとにスキナーでOCRソフトを介して画像として取り込む。次にその画像をOCRによって文字情報に変換する。こうして出来上がったテキストファイルを校正して、その他に必要な情報を付加し、整形して公開していくのである。我々は、OCRソフトによってテキスト情報を得るまでの過程を「1次入力」と呼び、1次入力されたものの校正を「1次校正」と呼んでいる。これらの作業に関しては、昨年までの試行錯誤によって、ある程度の方法論は確立できた。1次入力に関しては、ソフトとスキナーの相互関係（精度が良すぎても悪すぎても誤読が増えるのである）や、ソフトの解読用辞書の充実、といった点が主な問題であった。これらに関しては、他で先行して同様の作業をしている人々の実績を大いに参照することで、ある程度の方針を得ることができた。1次校正に関しては、テキストファイルをパソコンの画面上で校正するか、それともプリントアウトしたものに校正していくか検討を重ねた結果、現在では大蔵経を1段ずつプリントアウトしたものに校正する方法によって作業を進めている。このような方法によって、本年度末までに、大正蔵47巻の29典籍約500頁と、49巻約100頁の1次入力と1次校正が終了した。従って、1次校正の結果をテキストファイルに反映し、注情報などを付加して、整形して公開可能となるのであるが、いくつかの問題点も浮上してきている。そのいくつかを紹介しておこう。まず最も重要な点は、文字の形に関する問題である。つまりJIS規格以外の文字をどのように扱うかという点である。この点に関しては、テキストデータベースをどのように考えるかという点も関係してくる。つまり、印刷された現状の大蔵経の補助的なものとしてテキストデータベースを考えるか、それともこれまで存在しなかった新しい大蔵経を創造するのかという問題である。前者の立場に立つならば、できる限り現状の大蔵経の文字の形を反映すべきだということになるであろう。一方、後者の立場に立つならば、文字の形は時代によって変わっていくものであるから、文字の同一性が保証されて他の文字との混

同が起きないということが当面の問題なのであって、形が全く同じでなければならないということはないという結論に至るのである。そしていずれの立場にもそれなりの正統性がある。この問題は、これまで存在しなかったコンピュータ文化をどのように創造していくかという点に関する問題であると言える。従って、ハードの進化とともに変化していく要素もあるが、我々がそれをどのように受け入れ創造していくかということが問われているとも言えるのである。これはアルファベット以外の文字を使っている文化に共通の問題であり、これから時間をかけて取り組んでいかなければならない問題である。また現状の大蔵経をテキスト化するに当たっては、図表のような紙面をどうするかという点も未解決の問題である。図表の中の文字情報のみを捨てて可とするか、それとも全く別の方法が考えられるか。まさにこれまでの印刷文化と現状のコンピュータ文化の接点にある課題である。今後更なる議論を重ねなければならない点である。

委託研究

清沢満之研究

—全集の編纂と文集の刊行 ならびに史料収集—

教授・チーフ 神戸 和麿
(真宗学)

大谷大学は2001年に近代化100周年を迎える。これは、大谷大学の建学の志願を改めて確認する大切な機会である。と同時に、建学の精神を学内だけにとどめるのではなく、社会一般に広く知らせていく機縁ともするべきであると思われる。

このような課題に応えるためには、本学の学祖である清沢満之の思想研究は是非ともなされなくてはならない根本課題だと考えられる。また清沢満之研究のための基礎資料そのものの研究を通して、研究資料作成の方策についても検討を行う必要がある。

これまで真総研の一般研究において、真宗学科が中心となって、清沢満之の基礎資料についての共同研究がなされてきた。その中で、従来公刊された全集や文集などについての検討が加えられてきたことである。

本研究はそれらの成果を継承しながら、大学指定のショート・ターム・プロジェクトとして、清沢の基礎資料

刊行に向けての研究である。内容としては以下の二つの課題を掲げた。

一つには、さまざまな角度からの研究にたえうる学術的価値の高い『清沢満之全集』の刊行について、および多くの人々に清沢の基本的思索を紹介するための『清沢満之文集』の刊行について、内容や編纂形式についての案を提示することを主たる目的とした。

二つ目として、清沢満之の自坊である西方寺に遺されている清沢満之関係の貴重な史料について調査研究をし、史料の撮影およびデジタル画像によるデータベース化などの作業を進めていくという目的を立てた。

【全集の編纂に関して】

『清沢満之全集』は、これまで3巻本、6巻本、8巻本と3回にわたって出されているが、その構成や編纂方針を見通すことにより、本学独自の全集について検討を重ねた。

まず編纂の方針としては次のことが確認された。

- ・これまでに発刊された全集の成果を踏まえ、清沢研究の基礎資料として十分に堪えうるものを目指す。
- ・底本を明確にし、忠実な翻刻を目指す。編集を加えた場合には、必ず註を付す。
- ・論文、随筆、日記、書簡など、形態によって分類し、原則として編年体で構成する。

また、構成案としては、現在のところ次の6つの分類が考えられる。

- 1) 論文篇…雑誌などに公開されたもの
- 2) 随筆篇…『有限無限録』や『転迷開悟録』など。
また、その他の雑記類。
- 3) 日記篇…『臘扇記』を始めとする日記類。
- 4) 書簡篇…手紙、葉書類。
- 5) ノート篇…大学時代の受講ノートなど。
- 6) 資料篇…本学独自の資料類。

この中、「論文篇」においては、これまでの全集未収録のものがかなり発見されており、それを収録することには大きな意義がある。また、次項でも述べる西方寺の所蔵史料とのつき合わせにより、「随筆篇」「日記篇」なども正確を期すことができる。そして、まだ内容についての検討は残っているものの「ノート篇」についてはこれまで発表されていなかった史料であり、清沢研究の新たな一面を開くことが予想される。更に「資料篇」については佐々木月樵や曾我量深を始めとする本学ゆかりの人による論考を収録することにより、本学独自の資料篇としていくことができる。

以上、その要点だけを挙げたが、全集編纂の方向にある程度は見定めることができたと考えている。

【文集の編纂に関して】

『清沢満之文集』についても、これまで多くのものが出されているが、それらを検討することにより一応の方針を定めた。

- ・現在、文集が入手しにくいことを考えると、なるだけ広く流布することを第一に考えるべきである。
- ・清沢の人と思想を紹介するものであると同時に、本学の建学の精神を確認できるものでなくてはならない。
- ・開学100周年にも合わせ、本学の学生にも広く読まれるものとした。
- ・以上のことを考え、編集の手を加えて、できるだけ読みやすいものにする。また、解説や略年表などを付し、場合によっては難解な用語に註を付すことも考える。

具体的に何を収録するかについては、結論を出すまでには至らなかったが、さまざまな案を出す中で、以前の大谷大学編『清沢満之文集』を一つのモデルとすることが確認された。

【西方寺所蔵史料の撮影について】

以前の「清沢満之研究」班の調査を承けて、西方寺所蔵史料の中でも、特に清沢の自筆史料の撮影を10月に行った。本学の沙加戸教授の全面的な協力により、西方寺に複写台を搬入し、足かけ5日間の撮影となった。総コマ数は約7000枚、36枚撮りフィルム210本に及んだ。

その後、現像したポジフィルムを1コマずつ検討する作業に入った。撮り直しの必要のあるものをリストアップするとともに、内容について8巻本の全集とつき合わせる作業を進めた。

これらの史料については現在整理中であり、まだ公開できる段階には至っていない。しかしながら、史料の保存という面から考えても、まずデジタル画像化することは不可欠である。また研究利用のためにはデータベース化などの作業も進めなくてはならないが、期間内にはそこまで至らなかった。今後に残された課題である。

一年間という限られた研究期間であったため、積み残した課題も多い。しかしながら、幸い指定研究として継続されることが決定され、『全集』『文集』の編纂、さらにはデジタル画像によるデータベース化などの作業などは引き続き行われることが期待される。

委託研究

浄土真宗文献研究 —七祖聖教の編纂に向けての 資料収集と検討—

教授・チーフ 小野 蓮明
(真宗学)

本研究は、来る2001年の大谷大学開学100周年および2011年の宗祖親鸞聖人750回忌を視野におき、浄土真宗を研究する上で不可欠である七祖聖教ならびに親鸞の真蹟の公開に向けての資料収集と文献研究を行うことを目的とする。

本研究は、「蓮如研究プロジェクト」の基礎研究の成果を継承しつつ、七祖聖教編纂を目指して新たに編成されたものであるが、具体的には、善導の五部九巻について「宗祖加点本」によるテキスト作成の基礎作業と検討作業を並行して行っていくことを通じて、聖教編纂上の具体的作業手順の明確化と問題点の検討を進めていこうとするものである。

1999年度における検討作業として、1. 『観経四帖疏』の検討作業について。2. 聖教刊行の資料収集について。3. 聖教編纂に関する研究会について。という以上三点について経過を報告する。

1. 『観経四帖疏』の検討作業。

本年度当初には、「宗祖加点本五部九巻」に基づいて検討作業を進めていくに当たって、「宗祖加点本」が書誌学の中でどのような評価がなされているのかを先行論文を通して検討した。そのことを通じて、底本として依用するに値するものであることの確認がなされた。その上で、今年度は、善導の五部九巻の中でも殊に『観経四帖疏』から検討作業を進めるということに方針を定めた。

具体的な作業としては、まず、『専修寺本善導大師五部九巻』（法蔵館刊 真蹟集成別巻）に基づいた第一次原稿の作成を行った。その際、漢字の字体をどうするかということが問題となり、検討を重ねたが、どの方法を採用しても問題が残るということになり、結論は保留とし、とりあえずは旧字体に統一して表記して作業を進めた。

この第一次原稿とは、「宗祖加点本」に基づいて、返

り点・送り仮名・左訓等を手書きによって写し取ったものである。その中で、「一・二」点と「レ」点、あるいは「中」点が二重重なっているなど、同一の場所で返り点が二重に付せられている箇所、また、返り点が明らかに欠落していると思われる箇所、さらには、返り点・送り仮名・左訓等の読みとりが困難な箇所があり、それらの扱いについても検討が重ねられた。結論としては、問題点は注記というかたちで示していく方法を採用、「宗祖加點本」に基づいて可能な限り忠実に写し取っていくことを原則として作成した。

上記の作業と並行して、「宗祖加點本」に基づいての延べ書き文を入力する作業に取りかかった。「宗祖加點本親経四帖疏」をどのような様式でテキスト化するかにについては幾通りかの形態が考えられ、したがって延べ書き文の必要性の有無についての議論もなされたが、現段階としては延べ書き文を添付したものを想定し作業を進めることとした。実際の作業の中では、第一次原稿作成の作業において逢着したような問題点に突き当たり、検討も重ねられたが、結論としては、前と同様に「宗祖加點本」に忠実な書き下しとし、読み下しの上での補訂は最小限のものとするということを原則とし、問題点は注記というかたちで示していく方法を採用した。

以上のような作業を「親経四帖疏」の「玄義分」については漢文(訓点付)・読み下し・註の原稿作成を終了した。他の三巻(序分義・定善義・散善義)については、第一次原稿の作成は終了しているが、註に関しては作業途中であり、また延べ書きに関しては未着手である。四巻の進捗状況は異なるが、いずれの巻に関しても現段階では確認作業が十分に行われていないままであり、今後複数名による読み合わせ確認を重ねて、テキストとしての正確さを確保していくことが必要とされる。

2. 聖教刊行に関わる資料収集。

次に、聖教刊行に関わる資料収集についてであるが、この研究班は、七祖聖教編纂ということを見野に置くものであり、七祖聖教編纂に向けての基礎的研究を行っていく上で、「七祖聖教とは何か」、「聖教」とは何かという問題に直面せざるを得ない。この問題を考えていくにあたっては、浄土真宗における聖教の編纂・刊行がどのような意図のもとに取り組みられてきたのかという視点からの検討が必要とされる。このような問題意識に立つ資料の収集・検討は、これまで十分に行われてきたとは、決して言い切れない。したがって従来の聖教の編纂に関する資料の収集やその検討ということが是非とも必要であることを痛感し、その資料の収集に着手することとした。そこでまず真宗大谷派における聖教の校合や刊行に関する資料を大谷大学図書館目録等よりリストアップ

し、収集整理を行った。また『真宗年表』『学史史略年表』『東本願寺史料』『近代大谷派年表』等から大谷派における聖教刊行に関連する項目を抜き出して年表を作成した。また、七祖聖教の刊本の現況を把握すべく、大谷大学図書館所蔵の七祖に関する聖教の刊本をリストアップし、一覧表を作成した。これらの資料の一部を見た限りでも、例えば「七祖聖教」という名称の使用が江戸時代に始まったであろうということや、「七祖聖教」というもその内容は一様でない事などが窺える。今後はこれらの資料収集や年表作成の作業を継続していくことを通して、それらの資料の内容の検討作業がなされていかなくてはならないであろう。

3. 七祖聖教に関する研究会。

本研究班では検討作業の実際において遭遇した様々な問題について、聖教の編纂に関わられた講師を招いて研究会を開催した。3月16日(木)の午前10時より、本多弘之先生に「聖典の編纂について」と題して講演をしていただいた後、質疑応答の時間をもった。『真宗聖典』(東本願寺出版部)の編纂に携われた中からの具体的な講演は、本研究班にとって示唆に富むものであった。殊に、さまざまな困難にぶつかったときには、基本の方針がどれだけはっきりしているかということが決定的な意味を持つという指摘は、本研究班が常に確認し続けていかなくてはならない重要な課題を再認識させられたことであった。聖典の編纂の具体的な作業を進めていくにあたり、今後もこのような研究会の開催を通して、大谷大学としてあるべき「七祖聖教」とは何かという、編纂の基本方針および方向性の明確化がなされなければならないであろう。

委託研究

大谷大学 FD 研究 —大谷大学におけるFDのあり方と 授業活性化のための方策の研究—

教授・チーフ 並木 治
(フランス文学)

本研究の目的とするところは、多様化した学生の実態と今日のニーズに応じた活性化の工夫と新たな質的向上が求められている現在の状況をふまえ、大学全体の知的活力を教育面から高め充実させるための具体的方策を考

えることであった。それはまた、豊かな人間性の育成を究極の使命とする本学に相応しいFDのあり方を模索し構築することでもある。学生の知的関心や能力を効果的に引き出せるように一層の工夫をこらし、さまざまなレベルで魅力ある授業を展開できるかどうか、ひいては大学全体としての知的活力を高められるかどうか、大学の学問的伝統を活きたかたちで維持し展開させるうえで、今後の本学の命運を基本的に決する問題であると言っても過言ではない。本研究はかかる状況認識のもと、本学における今後のFDのあり方を具体的に探ろうと企画されたものであった。本学に相応しいFDとは、単に教育技術の向上や補習授業のノウハウを研究することに甘んじるものであってはならず、あくまでも人と人の生きた関わりのなかで共に学びあい、成長しあうことを可能にするFD、一人一人の学生の資質に応じた達成感、満足感、ひいては学びの自信と豊かなコミュニケーション能力の両立を目指すFDを、基本的に指向するものでなければならないという共通認識から、われわれは研究をスタートさせた。

おおよその研究分担については、特に専門教育とFDについて寺林脩氏が、特に人間学教育とFDについて織田顕祐氏が、教育心理とFDについて山本昌輝氏が、また真宗総合研究所主事の加来雄之氏が、授業全般のFDについて担当した。加えて、学外から京都教育大学の岡田伸夫氏に、特に語学教育とFDについて担当していただいた。また、チーフとして並木治が、研究全般のとりまとめと、学外のFD活動との連携活動を中心にお世話をさせていただいた。

ほとんど毎回3時間を越える公開研究会が研究活動の中心であったが、これは年間16回を数えた。また、「大学コンソーシアム京都」の「FDフォーラム」や「FDセミナー」等の催しにも、われわれの研究成果をふまえた協力を行った。特に「FDフォーラム」の第1分科会「授業に臨む教員の意識と学生の意識」は、本研究の問題意識が生かされ、「FDフォーラム」ではじめて設定されたテーマである。また、それに先だって学内で「教員意識調査アンケート」も行い、その意識の実態をかなりの程度まで明らかにすることができた。いまここで、それらの詳細な内容に立ち入る余裕はなく、ここでは本研究の過程でたびたび提起された基本問題、及び得られた共通認識についてのみご報告させていただくことにしたい。それはおおよそ次のようなものであった。

◇研究所の「指定研究」ではあるが、研究スタッフだけで独走し、近い将来、研究成果を一方向的に提示することに至ることは少なからず問題があらう。教員の多くと

ギャップが生じるようでは、かえって望ましいFDの展開を妨げる結果ともなりかねない。特に大谷大学のFDでは、すべての構成員間の心の連携が求められているのであるから、なおさらである。もとよりFDそのものが本質的に教師団のチームワーク、連帯意識を必要とするものだけに、教員チームの意識実態をまず見据えて、皆でそこからいかに共に意識向上を計るかが、本学では最も重要な研究テーマとされなくてはならない。

◇「大谷大学におけるFDのあり方と授業活性化のための方策」として、何よりも重要なのは小手先の教育技術の開発ではない。大谷大学の学生にいま最も必要なのは、それぞれの知的興味に応じて、学生の力ぎりぎりのところでじっくりと考えさせ、確固たる達成感と自信をつけさせること、ひいては学生同士、また教員と学生が共に学び合う喜びを実感させることである。

数回の研究会を経た時点で、われわれが共有せざるえなくなった認識として、次のようなものが目立つようになった。

◇毎回きわめて貴重な示唆に富む経験談や意見が出るにもかかわらず、「研究」の輪と連携がほとんど広がらない。研究会に出席したある学生の発言に「ここに来れない先生は一体どう考えておられるのでしょうか」というのがあったように、この局面を打開しなければならない。恐らくFDなるものが、ただでさえ多忙な教員に、一層の犠牲的努力を強いるものではないかという恐れを抱かせているに違いない。情報交換をしあい、連携しあい、支えあうことが、いかに授業効率を高め、負担を軽くすることにつながるかがまだ見えていない。

◇おのおのの授業は、大学が抱って建つ教育理念、学部ないし学科全体のカリキュラムとの関連ではじめて必要とされているものである。よって、それぞれの授業のあり方は、当然他の授業との連携なしに考えらるべきものではない。大学はバラバラな私塾の集まりではあり得ず、授業は教員個人の恣意的運営に任されるべきものでもない。しかしながら、現状ではそうした考え方は相容れない、私塾経営の意識が非常に根強いように思われる。

◇FD研究会への学生の参加を認めたところ、予想した以上のしっかりした意見を聞くことができた。今後はその輪を無理なく広げてゆくことが有益であらう。

◇後半の数回は、学内外のさまざまな講師の先生にまず話題を提供していただき、そのテーマをめぐって自由に議論する形をとった。なかでも英語授業のあり方を中心に最も多く発表をお引き受け下さり、話題を提供して下さったのが、京都教育大学の岡田伸夫教授であった。

◇研究成果をなんらかのまとまった形で公開すべきではないか。報告集、インターネット・ホームページ等、形

は何であれ、意識の向上、連携の強化に役立つのではないか。

◇FD研究を今後、大学の自己点検・自己評価の活動とをどう有機的に取り結んでゆくか、その可能性を追究することも重要である。「自己点検・評価委員会」との棲み分けも意味のないことではないにしても、今後はむしろ連携強化の方向性が求められよう。

以上、研究活動の大筋をふまえた非常に荒削りな報告であり、授業活性化のための具体的施策自体については、具体的に何も紹介することができなかった。それは、年間を通じ基本的意識の共有を目指す議論が絶えず熱く行われ続けたという事情にも関係している。われわれは取って細部の結論を急ごうとしなかったのである。パソコン利用の板書方法、出席カードを意見交換に利用する方法、グループディスカッション方式、授業ホームページ作成やEメール利用による授業活性化、ブリーフレポート形式応用授業等々、意識の共有を目指した具体的施策にはさまざまなものが考えられようが、最終的な具体的報告は今後の課題とさせていただきます。

研究をスタートさせて暫くした段階で、本研究は、日本私立学校振興・共済事業団から「私立大学等経常費補助金特別補助」の趣旨にかなうものとして、「大学改革推進特別経費」の枠で補助金を受けることができ、これにより基礎的研究条件や資料等を整えることができた。このことは、まことに喜ばしいことであったが、一方で、その研究責任を改めて実感させられた次第である。いずれにせよ、これは関係諸氏のご尽力の賜物であり、ここで改めて感謝申し上げたい。今後も大谷大学らしいFDの方向を見据えながら、研究が具体的かつ発展的に継続されることを切に願い、また一翼をになうべく覚悟を新たにするものである。

1999(平成11)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

唐代仏教石刻文の研究

研究代表者 大内 文雄
(東洋史学)

前年度において解読作業を進めた僧・尼、あるいは有婆塞の塔銘・墓誌については、その中の11種に対し、釈文と訓読を付して当研究所の紀要に掲載した。本年度は、それらに引き続き、より長文の碑文を解読の対象とした。当初、担当者が決定された碑文はおよそ11種であったが、長文を有する豊碑が殆どであり、参加者全員の討議を経たの解読作業が終了するには、それぞれ3～4週間が必要であったため、当初の予定を大幅に割り込み、本年度における研究成果として報告し得るものは、以下に記す五種に止まった。但しこれは、史学、文学、仏教学を専攻する15名前後の出席者が常に、毎週集まり、担当者が用意した釈文・訓読・語釈に基づいて検討を加えことから生じる予測通りの結果でもある。具体的な成果報告は、前年度の報告と異なり、今年度は釈文・訓読だけでなく、必要な語釈を付して行う予定である。以下、本年度の研究活動の経過の概要と、それぞれの碑文の持つ特徴について簡単に記す。

(前期)

碑名	成立年次	担当者
撰山棲霞寺明徴君碑	高宗上元3年(676)	大内文雄
大唐皇帝等慈寺之碑	太宗貞観2年(628)	丸橋充拓
大唐故大智禪師碑	玄宗開元24年(736)	福井 敏

(後期)

大智禪師碑陰記	開元29年(741)	福井 敏
大唐京師道德寺故大禪師大法師之碑	高宗顯慶3年(658)	松浦典弘
大唐實際寺故寺主懷惲奉勅贈隆闡大法師碑	玄宗天寶2年(743)	今場正美

以上であるが、大智禪師碑については夏期休暇を挟んで前・後期にわたって行われた。なお前期末には、本学の招聘研究員であり当研究班にも参加いただいた中国社会科学院の蔣寅氏による発表「本世紀唐代文学研究百年

回顧」を聞く機会を持ち、後期には丸橋充拓・福井敏の両氏によって研究発表がなされた。

さて明徴君碑であるが、これは江蘇省南京市北東の撰山棲霞寺に現存する、唐高宗の御製碑である。高正臣の奉勅書、篆額は王知敬による。明徴君とは南斉の明僧紹。中国三論学の展開に深く関わる人物である。南斉書巻54・高逸伝及び南史巻50に立伝されている。碑文にはこの明僧紹及びその第二子仲璋の事績が述べられるが、また南斉・梁初にかけての浄土教、あるいは無量寿仏大像の造立も記される事でも著名である。明徴君碑の立碑には明僧紹の五代の孫に当たる唐の明崇儼が関わっているが、新旧両唐書の方伎伝に立伝されるこの人物と唐代三論学との関係は不明であるものの、南朝仏教の歴史の一端を伝える重要史料である。

等慈寺碑は、広弘明集巻28に収録されている「唐太宗於行陣所立七寺詔」に明らかなように、唐朝政権による隋末群雄の平定後、特に華北における戦陣の地七所に寺院を建立し立碑した中の一つである。碑には竇建徳の勢力の平定と唐朝の権威確立を述べる。河南省の滎陽に現存する。撰文は顔師古、書者は不明である。

大智禪師碑は、唐代禪宗の中、北宗禪の創唱者神秀の弟子義福の碑である。師の神秀は武周時代に活躍したが、義福は玄宗の開元時代に普寂と共に活動した。唐代文化の極盛期における禪宗史研究の重要史料である。撰文は嚴挺之、書は史惟則による。西安碑林に収められている。

通常、道德寺碑と言われるこの碑は、尼寺である道德寺ゆかりの善惠禪師、玄懿法師二人の事跡を記す。碑に記される時代は東魏北齊・北周から隋を経て唐高宗朝に及ぶ。善惠は隋煬帝の大業6年、玄懿は同11年に没しているが、この両者は大業元年に煬帝の嗣子元徳太子の戒師となっており、隋朝の帝室と密接な関係にあった。なおこの碑は、1950年に西安より出土した新出史料である。西安碑林に現蔵する。

隆闡法師碑は、唐・善導の弟子懷惲の碑である。西安碑林に保存されているこの碑は、行書の名碑として古来名高いが、また中国浄土教史上、量も重要な石刻史料の一つである。碑文中に「親證三昧大徳善導闡梨」とあり、師善導の没後、長安神禾原の善導の兆域に靈塔を建立し、大塔を造ったのも懷惲であった。また武周時代に入り、長安實際寺主となっており、武周時代の浄土教の一端を知ることのできる史料でもある。

以上の5種の碑銘の他、前年度に会読を行った浄業塔銘・景賢身塔石記及び義福塔銘を附して、刊行に向けての準備作業を続けている。

共同研究

20世紀前半期中国東北地域
における宗教の総合的研究研究代表者 木場 明志
(日本史学)

本研究は、近時盛んとなりつつある中国東北地域（満州）研究の様相に鑑み、その中で極端に遅れている、あるいは等閑にされていると目される宗教の問題について、とりあえず20世紀前半期について総合的見地からの研究に踏み出そうとするものであった。

時期を20世紀前半期に設定した理由は、1904～05年の日露戦争が当該地域への日本進出の画期であり、また、1945年の日本敗戦、1949年の中華人民共和国誕生が日本との関係の最終段階であろうと概観したからである。本学における研究の国際化を目指す意味でも、中国東北地域の仏教を中心とする宗教関係史料の収集とその研究を進めようとした。特に、本学とは提携校関係にある中国長春市の東北師範大学との研究交流を視野に入れ、当年度は日本国内の研究基盤整備に意を注いだ。

まず、年度内に開催した共同研究会を列挙する。

1999年4月28日

報告「中国東北地区本願寺別院跡地調査報告」

真宗大谷派大阪教区教化センター主事

鹿崎 正明氏

同年6月23日

報告「海外神社の研究—研究の経過と現状、および中国東北地域における調査研究の見通し—」

神奈川大学教授 中島三千男氏

同年7月14日

報告「日本宗教の海外布教—新宗教の事例から研究の枠組みを考える—」

東京学芸大学教授 藤井 健志氏

同年12月3日

報告「中国東北地域研究の現状、および今後の課題」

東北師範大学中文系教授 呂 元明氏

同年12月8日

報告「海外布教と日語学校」

同朋大学教授 槻木 瑞生氏

同年12月22日

報告「小栗栖香頂と清末仏教」

東京大学大学院修学 陳 継東氏

2000年3月17日

報告「中国東北地域研究の課題」

東北師範大学外国語学院助教授 林 嵐氏

同年3月23日

報告「東本願寺千島布教から海外布教研究の視座を考える」

プリンストン大学大学院

マイカ・アウアバック氏

一見して察せられるように、従来からこうした分野について先行研究を行ってきている諸氏の報告が中心であり、しかも、研究の枠組みそのものや研究方法、研究上の課題について改めて検討することに努めてきた。というのは、20世紀前半期における中国東北地域の研究といえば、誰しもが日本による侵略行為、および植民地経営を想起し、ために、研究とはいえ侵略とそれに荷担した日本宗教という構図に陥り、硬直した結論だけが導き出される危険性が多いと考えたからである。そうしたただ一つの結論に至りやすいこと自体が従来の研究の問題点であり、まずはそこから問い直し、研究としての柔軟性や豊かさを取り戻そうと策したのである。幸いに、思うところは皆同じであって、従来の研究の行き詰まりの克服と、そこからの脱却において十分な研鑽を遂げることができたと思う。

上記のように、当該課題における内外研究者の連携を図り、研究基盤の整備を進めたのであるが、同時にもう一方で目指したことは、東北師範大学との共同研究の実行に向けて、東北師大教員との研究交流に歩みだすことであった。周知のごとく、東北師大とは1993年から提携関係に入り、短期留学生の派遣、長期留学生の相互交換、職員の交流、など順調に関係を伸ばして来たが、近未来的には教員レベルの研究交流や共同研究が期待される時節となっていると考える。本プロジェクトがそのまま期待に応えるものとなるとは言えないにしても、研究交流の嚆矢をなすことができれば幸いと願うところである。そのため、本年度は東北師大の呂元明教授、林嵐助教授のお二人を招き、当該研究を進める上での課題などについて御教示を戴いた。これらによって年度末には2000年度中に両校による共同研究会を開催することが約束され、より一層の研究上の発展が期待される基盤が整ったように思う。

また、中国人研究者による詳細を極める最新研究、あるいはアメリカ人研究者による世界史的視野からの最新傾向を踏まえた研究など、近年の若手研究者の考え方や

方法論なども積極的に学び、批判に耐えうる新しい研究方法の導入にも心がけた。

共同研究

他言語との混在を可能とする チベット語文字コード作成の研究

研究代表者 片岡 裕
(情報学)

チベット文字は、チベット語以外の言語をも記述しており、その多言語併用文書であるチベット文字文献の研究には、コンピュータによるチベット文字と他の文字との混在文書のテキスト処理が有効かつ必須である。しかし、正しいコンピュータ処理が可能なチベット文字コードが存在せず、検索や表示、データ交換等で支障をきたしている。完全なチベット文字コードが作られていないのは、チベット文字の表記法が持つ、複雑性、曖昧性及び多言語表記能力によって文字定義が困難なことによる。本研究の目的は、完全なチベット文字コードを作成するため、チベット文字文書に対する必要なテキスト処理の項目と条件を求め、チベット文字の基本字母種とその結合範囲を確定し、正しい表示と編集に必要な不可視情報を得て、チベット文字コードのデザインに必須な条件を全て示すことである。さらにこれをもとに、他の文字コードと混在可能なチベット文字コードを提案し、実際の処理ソフトウェアの開発を促進することにある。

文字コードの作成の第一段階は、基本文字種の確定である。チベット文字は、基本音節を示す基本音節字母(基底文字とも呼ばれる)に、その音節の音価を変更する記号が付加されて新たな音節文字を表記する。このように字母と変更記号を結合して表記する文字を結合音節文字と呼び、基本字母とともに結合の最大範囲を確定する必要がある。チベット文字は、サンスクリット語などの外来語を記述するため、字母が増加し、さらに結合範囲も拡張され、1文字を1音節としてツェックで区切るチベット語のチベット文字表記規約が、必ずしも守られない。従って、ツェックを基準とした既存の文字範囲の確定方式は、正しく字母の結合を表現しえないことが判明し、基本字母と結合した文字の範囲の明示が必須となった。そのため、研究者間で結合文字図形を含む文字図

形の交換が必要となり、最良のチベット文字資料である北京版チベット大蔵経の高精度デジタル画像化に取り組んだ。この研究の結果、極めて高い精度でチベット文字のデジタル画像の作成に成功した。

字母種および結合字種に関しては、チベット語の範囲では示されているが、非チベット語の範囲では未確定で、マハヴィウッドパティを用い、結合の範囲を示すこととした。チベット文字の構造から、非チベット語のチベット文字への転写(音訳)では、あらゆる結合の可能性があり、そのままでは、結合範囲の決定ができない。しかし、可読であるための条件と表記上の制限から、結合される文字の範囲が限定されることが判明した。即ち、文字の図形結合される範囲が音節を超える場合でも、不可視区切り記号の付加で、1音節単位が判明する。しかし既存のチベット文字コードでは、そのような明示的な区切り記号を持たないか、ツェックだけで区切っていることがわかり、区切り記号の持つべき機能に関して研究した。

区切り記号の機能は、基底文字に付加することで機能を示す。例えば、ある区切り記号は、基本音節文字から母音を消去して母音無しの音節文字(子音+φ)とし、それを音節の変更記号と解釈することで、文字に対しては子音化を示し、同時に表示図形に対しては、連結を示すことができる。同時に、テキスト検索に関しては、区切り記号を基底文字の後ろに付加すれば、音節として使用される文字と母音が欠落した文字とを分けて検索できる。このように、文字コードではテキスト処理に対する整合性も確保可能でなければならない。この方法では、子音化された文字が連結しても、音節としては連結を示すため文字数を確定可能であり、同時に音節内に関しても正しく文字検索が可能となる。一方表示に関しては、サンスクリット語の表記では、1音節を超えて上下に連結される場合と、横に表記される場合がある。従って、表示に関しては、明らかに表示用の見えない文字コードが必要になる。この表示の指定しに関しては、マハヴィウッドパティを用いて考え得る可能性を検討中である。

このように、チベット文字の音節構造と表示図形、テキスト処理時の整合性、結合の範囲を調査することによって、それらを正しく処理することがチベット文字コードの設計における束縛条件となることが示された。2000年度は各束縛条件を詳細に決定する。下記に研究成果報告の一部を示す。

[1]北京版チベット大蔵経の高再現性デジタル画像化：高精度スキミング過程、情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」第43回、人文科学とコンピュータ、43-6、pp.43-50、1999年7月16日

[2]北京版チベット大蔵經の高精度デジタル画像化、情報処理学会第59回全国大会、口頭発表及び予稿集第4分冊、1999年9月28日

[3]一次資料として使用可能な精度保証付き高再現性デジタル画像の作成と提示、図書館情報大学第16回デジタル図書館ワークショップおよび情報学基礎研究会、論文は、図書館情報大学ホームページにて公開予定、1999年11月30日

[4]Multilingual Text Processing beyond One Glyph Manipulation、財団法人国際情報化協力センター、通産省工業技術院委託国際規格共同開発調査「多言語情報処理環境技術」成果報告書、pp.125-129、2000年3月

[5]高精度デジタル画像の高再現性表示、京都大学大型計算機センター第64回研究セミナー、口頭発表及び報告書 (ISSN 0910-3201)、pp.74-85、2000年3月24日

個人研究

『ダブリンの人々』研究

研究代表者 米本 義孝
(英文学)

20世紀を代表する作家の一人ジェイムズ・ジョイス(1882-1941)の作品は、日本では『ユリシーズ』(1922)や『フィネガンス・ウェイク』(1939)ばかりに集中して研究されている。私の場合は、学校を卒業して大学の教員になった時から、ジョイスの初期の短編集『ダブリンの人びと』(1914)に興味をもち、ほそほそと勉強してきた。そして、今から約20年ほど前、恩師の依頼で『ダブリンの人びと』全15編中の8編を選んで、大学用テキストとして南雲堂出版社から2冊上梓したのを期にして、本格的な研究に励み、この短編集を配列順でなく、作者の創作順に研究して、1年に1編を目標にして論文を書くことにしてきた。私のこの作品への研究・独創性としては、作品の内容面だけでなく形式面に注目し、言語・文体に徹底的にこだわって作品分析をしたことと、作品のもつリアリズムを浮き彫りにしたことであり、その両者を結びつけて論文作成するのを心がけたことである。研究の完成が予定よりはるかに遅れたのは、なによりも私の仕事が遅いことと怠惰とに原因があるのだが、

もう一つの理由は言語・文体などの形式の面からの独自の研究が私には難しかったからである。しかし、やっとあと2・3年ぐらいで完成する見通しがでてきた。この一年では、これまでに書きためてきた諸論文を、ここ数年間に英米で次々と出版されてきた『ダブリンの人びと』の研究書を読み返しながらか、研究書としての体裁を整えたり足りない部分を補ったりすることに全力をあげた。そのため、「研究経費」の三分の一は、次々と新刊の出るおびただしい数の英米の研究書や英英辞典、ならびにOEDのCD-ROMなどの諸費用にあてた。

わたしの研究のもう一つの独自性として、作品にあらわれた地名に意義をみいだすことである。『ダブリンの人びと』の特徴として、その主人公たちが市内を四方八方によく歩きまわることがあげられる。ジョイスの意図が都市ダブリンそのものを描くことでもあり、そのためには主人公たちに市内の方々を歩かせる必要があった。『ダブリンの人びと』のリアリズムは徹底しており、読者が地図を手元に置けば、登場人物が街中を歩きまわる道順をたどることができるようになっている。私も各編の主人公たちが歩いたとおりに歩き、私の論文に欠けている地名そのものの意義をつかみ、それをぜひ論文に加えたかった。そして、念願がかなって、平成11年6月に5日間ダブリンに滞在し、各短編にあわせてできるだけ市内を歩きまわることができ、「研究経費」の半分はその渡航費用と滞在費にあてた。

以上の研究の成果として、学術雑誌『英語青年』(研究社出版)に、『ダブリンの人びと』再読』という論文を2000年の9月号から4月間連載した。その論文の概要は以下のとおり。

ジョイス文学においては、必要以上に難しい読み方がされ、『ダブリンの人びと』も、今日まで重々しく暗い作品と評価されすぎてきた。そういう先入観を取り払って、この作品をリアリズムの観点で精読すると、面白く、時には笑いに誘われることもある。すなわち、単純にリアリズム読みをすれば、登場人物たちが真面目で深刻であっても、ジョイスの正確無比な筆致によって、第三者の読者にはそれが面白く滑稽に映ることがあると思われる。次に、技巧の面に注目した。ジョイス作品では、言語表現、意識の流れ、文体などの技巧面が重要とされている。そこで拙稿では、それらをどのように内容面と係わって解釈するかを論述した。作品の芸術的価値に気づけば、一読した際に受ける内容の陰湿さをはじめとする否定的な要素が覆えり、芸術として優れていると感動できるからである。論文全体で、ジョイス作品の言語を徹底的に追究したつもりである。

また、2000年の初秋に南雲堂出版社から *Araby and*

Other Storiesを出版した。このテキストは、『ダブリンの人びと』15編のなかから4編を採録して、2人のジョイス研究者により、1957年に初版が、1983年にその改訂版が上梓された。好評をもって迎えられ版を何度も重ねているうちに、1990年代に入ると両先生が相次いで泉下にお入りになられてしまった。その後も『ダブリンの人びと』に関するすぐれた研究書や注釈書が数冊出版され、1993年にはテキストそのものの改訂版が出た。そこで注釈だけでなく、テキストも改訂する必要にせまられ、今回私が全面改訂することになった。今回の改訂で特記すべきは、ジョイスの作品では言葉の一つ一つが正確に選びぬかれているため、ありふれた語や語句でも、その的確な意味やニュアンスを明らかにする必要があると思われる場合には、英英辞典を頼りにして必要以上に注をつけたことである。そのため、テキスト50頁に対し、注釈は81頁になってしまった。

「研究経費」を文具、校正費などの雑費に有効に使わせてもらい、研究に大いに役立ったことも、付記しておきたい。

個人研究

司書課程『資料組織演習』における演習用ソフトウェアの開発：授業への利用の可能性

研究代表者 山本 貴子
(図書館学)

1996年8月に公示された図書館法施行規則の一部改正により、司書および司書補の講習において履修する必要のある科目とそれぞれの単位数が決定された。この新カリキュラムは、司書講習用として規定されているに過ぎないが、実質的には、多くの大学での司書課程におけるカリキュラムとして運用されており、本学でも、1997年4月から、この新カリキュラムに準拠した授業が開始されている。

以前のカリキュラムは、1963年3月に改定されたものであり、その内容では現実に即していないというのが今回改正された理由であった。そのため、この新カリキュラムには、「情報機器論」、「情報検索演習」など、現代の情報化社会に対応した科目が多数含まれている。

一方、司書課程では、資料組織法の基礎を理解するこ

とが不可欠であり、そのためには、目録法、分類法の演習が重要な役割を担っている。これらの演習は、従来、カード目録の作成や手作業での分類の付与が大半を占めていた。しかし、現在、図書館では、目録や分類の作業についてはコンピュータを使用したデータのダウンロードやオリジナル入力、アップロードが中心となっている。従って、図書館の現場に根ざした教育を行うためには、これらの科目でもコンピュータを利用した教育を行う必要がある。

しかしながら、各大学における新カリキュラムへの移行は、1998年3月に完了したところであり、教育環境はいまだ整っていない。新カリキュラムに対応した教科書の中にはまだ出版されていないものもあり、各演習に必要なツールの開発に至っては、ほとんど手がつけられていない状況である。

そこで、本研究では、コンピュータを利用した資料組織法の演習ツールを構築することを目的とした。当ツールは、目録データのダウンロードとアップロード、およびオリジナル入力についての教育ができる図書館の目録システムとした。その際、現代の国際化に対応させるべく、国際的にも通用するデータの作成ができるシステムをめざした。

まず、国内外で使用されている目録システムと、同じく国内外で使用されている目録の教育システムについて文献調査を行った。その結果、目録システムについては、国内外ともに明らかとなり、どのような目録システムが利用されているかも明らかとなった。一方、国内で使用されている目録の教育システムは2種類に留まり、教育に必要である典拠コントロールを独自に整備しているものは存在しなかった。そこで、海外の教育システムを検討した結果、The Library CorporationのTLSを選定し、このソフトウェアが教育用として使用できるかどうかを探った。

また、国際的にも通用するデータの作成について文献調査を行った結果、世界的な傾向として、図書館を含む情報サービス機関では、WWW上のデータについて、目録に相当するメタデータを作成・流通させようとしていることが判明した。このメタデータの作成・流通システムは、Dublin Coreと呼ばれ、1995年から開始されている。1999年10月25日から27日にフランクフルトで第7回ワークショップが開催されるなど現在も進行中であって、今後の図書館界にも多大な影響を与えることは間違いない。

したがって、現在、研究中の演習用ソフトウェアでも、このメタデータが作成できるかどうかの演習を取り込む必要が出てきた。そこで、選定したソフトウェアが、従

来からある目録のみならず、メタデータの構築も含めた資料組織法の演習ツールとしても使用できるかどうか調査した。

その結果、一般的な図書館目録の教育用システムとしては、AACR2の教育に適していることが証明された。また、メタデータの教育用システムとしては、このシステムの特徴である、よく整備された典拠コントロールが、反って、煩雑さを招きかねないということも判明した。

真宗総合研究所彙報 1999.4-2000.3

◇真宗総合研究所委員会

- 議 題 1. 2000年度の研究体制について
 1. 客員研究員の認定について
 1. その他

日 時 4月26日(水) 16時10分～

場 所 第3会議室

◇「指定研究」チーフ・庶務連絡会

- 議 題 1. 2000年度の研究体制について
 1. その他

日 時 5月16日(火) 12時10分～

場 所 第5会議室

◇「指定研究」庶務連絡会

- 議 題 1. 2000年度の事務手続きについて
 1. その他

日 時 5月30日(火) 12時10分～

場 所 第5会議室

◇真宗総合研究所委員会

- 議 題 1. 2000年度研究体制の一部変更について
 1. 研究所に関する企画委員会答申について
 1. その他

日 時 7月21日(金) 14時半～

場 所 第3会議室

◇真宗総合研究所委員会

- 議 題 1. 2001年度「一般研究」選考について
 1. その他

日 時 11月9日(木) 13時～

場 所 第4会議室

◇「指定研究」チーフ・庶務連絡会

- 議 題 1. 2000年度前期研究状況報告と今後の研究
 計画について
 1. その他

日 時 10月10日(火) 12時10分～

場 所 第5会議室

◇東洋大学井上円了記念学術センター・大谷大学真宗総合研究所共同研究「井上円了と清沢満之の研究」第2回共同研究会

議 題 「円了の『中』と満之の『中』」

講 師 田村晃祐氏(東洋大学教授)

日 時 12月9日(土)～12月10日(日)

場 所 大谷大学湖西キャンパス セミナーハウス

◇真宗総合研究所委員会

- 議 題 1. 2001年度の研究体制について
 1. 内規の一部改正について
 1. その他

日 時 2月13日(木) 19時～

場 所 第3会議室

◇真宗総合研究所委員会

- 議 題 1. 2001年度の研究体制について
 1. 内規の一部改正について
 1. 紀要18号の編集について
 1. 所報38号および39号の編集について
 1. その他

日 時 3月22日(木) 16時半～

場 所 尋源館会議室

●「指定研究」研究会

◎国際仏教研究班

◇「曾我量深『歎異抄聴記』翻訳研究」

講 師 ヤン・ヴァン・ブラフト氏(南山大学名誉教授)

日 時 4月24日(月) 16時～

場 所 第4会議室

◇「金子大栄『真宗学序説』の英訳について」

講 師 ロバート・F・ローズ氏(本学助教授)

(1)日 時 5月19日(金) 14時30分～

場 所 第5会議室

(2)日 時 5月26日(金) 14時30分～

場 所 第5会議室

◇「安田理深『名は単に名にあらざ』英訳研究会」

講 師 ポール・ワット氏(デュポール大学教授)

(1)日 時 6月5日(月) 14時30分～

場 所 第5会議室

(2)日 時 6月12日(月) 14時30分～

場 所 第5会議室

(3)日 時 6月16日(金) 14時30分～

場 所 第5会議室

(4)日 時 6月19日(月) 14時30分～

場 所 第5会議室

(5)日 時 6月23日(金) 14時30分～

場 所 尋源館会議室

◇「毎田周一センター設立について」

講 題 羽田信生氏(毎田周一センター所長)

日 時 6月9日(金) 14時30分～

場 所 第5会議室

◇「金子大栄『真宗学序説』英訳研究会」

講 題 ロバート・F・ローズ氏(本学助教授)

日 時 7月21日(金) 16時～

場 所 第1研究室分室1

◇「清沢満之の英訳」
講 題 マーク・プラム氏(ニューヨーク州立大学教
授)
日 時 7月28日(金) 14時半～
場 所 第5会議室

◇大谷大学・マールブルク大学共同研究
「浄土真宗と福音主義神学の対話」記念講演
パートI
講 題 「今日の実践神学」
講 師 ゲルハルト・マルセル・マルティン氏(マ
ールブルク大学教授)
日 時 10月23日(月) 14時半～
場 所 講堂棟3階 多目的ホール

パートII
講 題 「宗教学と宗教対話」
講 師 マイケル・パイ氏(マールブルク大学教授)
日 時 10月30日(月) 16時10分～
場 所 講堂棟3階 多目的ホール

◇大谷大学・マールブルク大学共同研究
「浄土真宗と福音主義神学の対話」特別講演
パートI
講 題 「霊性—エキュメニカルな意義と宗教間対
話の意義—」
講 師 ハンス・マルティン・バルト氏(マール
ブルク大学教授)
日 時 3月12日(月) 13時～
場 所 講堂棟3階 多目的ホール

パートII
講 題 「われ生きるにあらざ…—キリスト教信仰
と人格の同一性—」
講 師 ハンス・マルティン・バルト氏(マール
ブルク大学教授)
日 時 3月15日(木) 13時～
場 所 講堂棟3階 多目的ホール

◇大谷大学・マールブルク大学共同研究
講 師 ハンス・マルティン・バルト氏(マールブ
ルク大学教授)
(1)日 時 3月13日(火) 13時～
場 所 第2会議室
(2)日 時 3月16日(金) 13時～
場 所 第2会議室
(3)日 時 3月19日(月) 14時30分～
場 所 尋源館講堂

◇「安田理深『名は単に名にあらざ』英訳研究会」
講 師 ポール・ワット氏(デュポア大学教授)
(1)日 時 3月12日(月) 10時～

場 所 第5会議室
(2)日 時 3月13日(火) 10時～
場 所 第5会議室
(3)日 時 3月16日(金) 10時～
場 所 第2研究室分室1

◇近代教学翻訳研究会
講 師 羽田信生氏(毎田周一センター所長)
日 時 3月14日(水) 10時30分～
場 所 第2研究室分室1
パートII
講 題 「われ生きるにあらざ…—キリスト教信仰
と人格の同一性—」
講 師 ハンス・マルティン・バルト氏(マール
ブルク大学教授)
日 時 3月15日(木) 13時～
場 所 講堂棟3階 多目的ホール

◎清沢満之研究班

◇「日本と宗門—過去・現在・未来の問題」
講 師 高木宏夫氏(井上円了記念学術センター)
三浦節夫氏(井上円了記念学術センター)
日 時 4月14日(金) 14時30分～
場 所 第1研究室分室1

◇「『宗教哲学骸骨』をめぐる」
講 師 今村仁司氏(東京経済大学教授)
安富信哉氏(本学教授)
日 時 3月5日(月) 13時～
場 所 第5会議室

◇「『清沢満之全集』の編纂について」
日 時 3月5日(月) 15時30分～
場 所 第5会議室

◎西藏文献研究班

◇学術講演会
講 題 「『現観莊嚴論』と『善説金鬘』について」
講 師 ケンリンポチェ・ツルティム・ブンツォク氏
(デブン寺ゴマン学舎長)
日 時 11月14日(火) 16時10分～
場 所 第5会議室

◎浄土真宗文献研究班

◇「聖典の編纂について」
日 時 3月1日(木) 10時～
講 師 三栗章夫氏(本願寺出版社・龍谷大学非常勤
講師)
場 所 第1研究室分室1

◎大谷大学FD研究班

◇2000年度第1回公開研究会
講 題 「授業への私の工夫」

講 師 山本昌輝氏 (本学教授)

日 時 5月26日(金) 18時～

場 所 第5会議室

◇2000年度第2回公開研究会

講 題 「社会学演習の現場」

講 師 高井康広氏 (本学助教授)

日 時 6月15日(木) 18時～

場 所 第5会議室

◇2000年度第3回公開研究会

講 題 「授業観察からFDへ」

講 師 石村雅雄氏 (京都大学高等教育教授システム
開発センター助教授)

日 時 7月7日(金) 18時～

場 所 1号館1112教室

◇2000年度第4回公開研究会

講 題 「多人数講義における問題点」

講 師 谷口奈青理氏 (本学専任講師)

日 時 9月29日(金) 18時～

場 所 第5会議室

◇2000年度第5回公開研究会

講 題 「第1学年の授業における問題点—人間学 I
と仏教学演習 I—」

講 師 山本和彦氏 (本学専任講師)

日 時 10月20日(金) 18時～

場 所 第5会議室

◇2000年度第6回公開研究会

講 題 「英語の授業における問題点」

講 師 浅若裕彦氏 (本学専任講師)

日 時 11月17日(金) 18時～

場 所 尋源館会議室

◇2000年度第7回公開研究会

講 題 「大学での学生の学びについて—大学生の学
力低下問題を手がかりにして I—」

講 師 石村雅雄氏 (京都大学高等教育教授システム
開発センター助教授)

日 時 12月1日(金) 16時半～

場 所 第4会議室

◇2000年度第8回公開研究会

講 題 「大谷大学におけるフランス語(第2外国語)
について」

講 師 ディディエ・ヴェステル氏 (本学助教授)

講 題 What to Teach and How to Teach—授業改
善模索中—」

研 究 所 報 第 39 号

2001年 3月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒602-0802 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目鶴山町8番地

Tel. 075-212-5500 Fax. 075-212-5501